
東方孝之伝（努力伝）

アリストリア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方孝之伝（努力伝）

【Nコード】

N9714K

【作者名】

アリストリア

【あらすじ】

とある事情で転生入り（幻想入り）するお話です。
主人公の孝之はとある事情で転生してしまう。転生する前に神様がとある能力を授けてくれた。

これは作者が初めて書いた小説です！ たぶんあれですがよろしくお願いします。

神様の部下のせいで転生入り（幻想入り）

「はあくまたやられちゃった」

薄暗い部屋の中に一人いる少年？河野孝之はそう呟いた。

孝之は肩をがっくりと落とし、深いため息を吐いた

「あと少しあと少しで東方紅魔郷をクリアできたのにな」

そう独り言を呟きながらP Cの電源を落とした。落とした後、椅子にもたれかかり先ほどプレイしてたP Cゲーム東方紅魔郷をやり始めた理由を思い出していた。

元々、孝之はゲーム好きでR P G系ゲームは大好きなのだがS T G系のゲームは嫌いだった。嫌いだったのだが、4年前ぐらいに友人がこの東方紅魔郷は絶対にはまるからと言われて、友人の前でやってみたのだが、意外に面白くやり始めたら止まらなくなつて3時間以上ぶっ続けでやってしまったんだっけな？と孝之は思い出していた。

色々と思いついてるうちに、孝之は椅子から立ち上がり背伸びをしながら欠伸をした。

「眠たいな、そろそろ寝ようかな」

明日は学校もあるしと心で思いつつ服を脱いでパジャマに着替えてベッドに寝転がる。

「おやすみ」

そう呟きながら目を閉じ意識を手放した。

寒くて目が覚めた、目が覚めたのだが周りには何もなくて真っ白な空間が広がっているだけだった。

「夢だな、真っ白な空間で自分の意思で歩けるだなんて夢だな」

自分の頬を軽めに叩きながら立ち上がる、何でこんな夢を見るんだろう、意識もしっかりしてるし、ちゃんと自分の意思で手足が動く。

「きつと気のせいだ、夢のはずなのに手足が自分の意思で動くなんて、きつと夢に違いない」

現実逃避しながら辺りを歩く、やっぱり真っ白な空間で周りには人が一人もいない、叫んでも反応なんてなし。

「やだなあ、目を覚ませ俺よ目を早く覚ませ！」

さつきより強めに叩き始める、もしも真っ白な空間に知り合いがいたならば、変態扱いかマゾヒスト扱いになっていただろう、歩き回って3時間ぐらいたったのだらうか、流石に疲れてくる。

「疲れたZE」

ふざけながら座り込む、どうしてこうなったんだ、そう思いながら目を閉じた。

目を閉じて10分ほど過ぎた。10分間ほど色々と考えた結果、ココは夢の中ではないとそう結論づけた。手足も動くし考えれるし、夢の中とは考えられなかった。とにかくどうやってココからでようかなと考えようとしていたら声が聞こえた、何となく自分の名前を呼ぶ声が聞こえた……と思う。孝之は目を開けて立ち上がった。

「何か右の方向から声が聞こえた！」

孝之はこの真っ白な空間で声が聞こえたのに驚きつつ、声が聞こえた方向に走り出した。走り出して2分ぐらいか、真っ白な空間に一人の男性がいた、髪は金髪でスポーツ刈り、顔は目がキリっとして鼻はちょっと大きい、唇の色は赤色、服装は中学生が着る学ランを着ている、孝之はその人物に声をかけてみた。

「すいませーん、急に変な事をききますけど、俺の事呼をびましたか？」

できるだけ丁寧に聞いてみた。

「呼んだよ、河野孝之」

この言葉を聞いて、とある事に気がついた、何でこの人物は俺の名前を知っているのか。孝之はそう思い、何で自分の名前を知っているかと聞いてみようとしたとき。

「何で君の名前を知っているのかって？ それは私がこの世界で最も偉大なる神様だからだよ」

自分の思っている事を言われて驚いたってよりも、いきなり自称神様って言う人だから、頭がかわいそうな人だと心配してしまったという寛恕が強かった。

「イキナリ失礼と思いますけども、あた「頭は大丈夫だぞ、あとかわいそうな人とはなんだ、まるで私が頭がどつか逝ってるみたいことを思うでない」

どうやら、この自称神様は何故か俺が思っている事が分かるらしい。孝之はそう思いつつ、なぜ自分呼んだのかを聞こうとしたら。

「呼んだ理由はいくつかある、覚悟して聞きたまえ」

ちょっと喋らせろって思ったが、いちいち喋らずに相手に言いたい事を伝えられるのならいいだろう、孝之はそう思い黙って自称神様の話を聴くことにした。

「先ず1つめ、君は死んだ」

やっぱり、この自称神様は、どうやら頭が逝っているようだな、話を聞くつもり孝之であったが、流石にこの自称神様の話してる1vが予想より斜め上だったので、自称神様に背を向けて歩き出そうとした。

「私の話を聞け、河野孝之」

ベキゲキベコオ！と変な音がした、孝之はなぜか出た冷や汗をかきながらその音がした方向……さっき自分がいた場所を見た。

「私の話を聞く気になったか、河野孝之よ」

先ほど自分がいた場所は、でっかく陥没いた、何か巨大でとても重たいものを高いところから落として陥没したような跡、辺りに人は俺と自称神様しかない、必然的に、あの自称神様がしたことになる、冷や汗がでていたがもつとでた、あの自称神様が言ってることは全て本当だと、もしも先ほどのようにもう一度自分が同じように背を向けて話を聞かなかったら、あの地面のように陥没する、いや、押しつぶされると、そう孝之は思った。

「やっと話を聞くきになったか、なら話を続けるぞ。2つめ、河野孝之、お前には違う世界に行ってもらう、早く言えば転生……憑依か？ まあ、とにかく転生だ」

自称神様……いや、神様はどうやらそういう憑依とか転生とか難しい言葉は苦手らしい、孝之はそう思いつつ、何で自分が死んだのかとお思いはじめた。

「確かになぜ自分が死んだのかが不思議だろう」

神様はなぜ死んだか理由を言い始めた。

「死んだ理由はだ、私の部下が河野孝之の「孝之でいいです」孝之の寿命を面白半分て弄くっちゃってね、それで死んじやったってわけ。スマンね」

さっきまで偉そうにしてた神様が、謝ってきたので、少々びっくりました。どうもこうも、神様が謝る必要なんてないのに、そう思ったからだ。

そして、死んだんだ俺は、証拠なんて無いのになぜか納得してしまうだなんてバカだな俺は、そう孝之は思った。

「神様が謝る必要なんて無いですよ、謝らせるなら神様の部下ですよ」

「いや、部下の責任は上司の責任でな、部下も一緒に謝らせようと思ったのだが、ちよっとお仕置きをしすぎてしまっただけ、とにかくスマンな、それでだ、孝之」

神様に呼ばれた孝之は素直にハイと言った

「転生する君には、とある能力を授けたいと思う」
神様がそう言った。孝之は能力を授けると言われて少しだけ嬉しかった。もしかしたらチート万歳なんてできるかもしれないからだ。

「その能力とは……」

孝之は唾を飲み込んだ、ゴクつと音が周りに響いた感じがした。とても緊張してるんだと思った。

そして、自分でも気づかないうちに、神様と同じ言葉を発していた。

「その能力とは……」

その言葉を聞いて、神様はニヤつと笑い言った。

「努力すればどんな力でも手に入れる程度の能力だ」

その言葉を聞いて啞然とした、程度の能力、東方シリーズのキャラクター達が持っている能力の呼び方の最後でつく言葉……例えば、主人公の博麗 霊夢と霧雨 魔理沙の能力は、『空を飛ぶ程度の能力』が霊夢の能力で、『魔法を使う程度の能力』（主に光や星を元にした魔法）が霧雨 魔理沙の能力、とある事が頭に思い浮かぶ、神様がなぜ程度の能力と言ったのか、自分はもしかしたら。

「もしかしくなくても、孝之が思っているとおりだ、君は東方の世界に転生する、実は転生とかはダメなんだが、今回ばかりは私のミスだからな、それじゃ、転生させるから目を閉じるんだ」

命令口調だが優しさに満ち溢れる声に孝之は嬉しかった。自分を心配し安心させてくれるような声に嬉しかった。流石にぺしゃんこにされるかと思った時は怖かったが、けど少し心残りがあった。

「母さんと父さんとかどうなるんでしょうか」

そう孝之の心残りは父親と母親にあった。朝起きたら息子が死んでました。なんてことがあったら、父さんと母さんは悲しむと思う。そこまで愛してもらってる自信があるからそう思えた、

「安心しろ、私に任せなさい」

にこつと笑った。何となく神様に任せてもいいかな、孝之はそう思い、目を閉じた。

「では、始めるぞ」

目を閉じてると、何か呪文のような声が聞こえる、なんて言うてるか分からないけど、少々不気味だな、そう思えた。

そして、だんだん立っているのが辛くなっていき倒れた。意識がなくなる寸前に聞こえたのは、神様の「頑張って来い」という励ましの言葉だった。

神様の部下のせいで転生入り（幻想入り）（後書き）

はじめまして、小説を書くのは初めてになります、ですので色々
と批判があつたりしたら怖いですが、小説を書いたりするのを上手
になりたいので、ドシドシと批判または励ましの言葉とか感想をお
待ちしております。

小説を読んでくれる人に感謝です。

編集してみた。

嫌だ・・・（けっこうゲロイ表現とがR15かもしれません）（改）（前書き）

こりずに頑張って更新してみました。

孝之は神様のおかげで転生しました。

嫌だ・・・（けっこうグロイ表現とがR15かもしれません）（改）

走る音と自分の息遣い、そして心臓の音が嫌なほどハッキリと聞こえる。どれくらい走っただろうか、ふと後ろを振り向いた、どうやら妖怪は追っつけてきてないらしい適当に走り回ったのが良かったのか、とにかく安堵した孝之は走るのを止めて歩き始める、数分してから孝之は腰を下ろし座り込んだ。

「疲れた」

まだ微妙に息が乱れてるから深呼吸をする。少しだけほんの少しだけその場で休憩をしようとおもった。

「どうも今日は厄日だな」

そう苦笑いしながら先ほどの妖怪の姿と犯人の姿を思い出す。あたり一面に広がる血の匂い、その匂いを思い出したら吐き気がした。はじめて人の死体をみた、その死体が臓器を撒き散らした死体なのだ、当然といえば当然といえよう。

「うつ……気持ち悪い」

とにかく気持ち悪いから吐いた。吐いて吐いて吐いた。もう出る

ものなんてないのに吐き気が止まらない、胃液が口から出て地面に落ちる、いくら吐いても収まらずどうしようもなかった。吐いてから結構時間がたち吐き気がなくなりはじめた何とか足腰に力が入りだした。

そして、孝之が歩き出そうとしたらソイツが現れた。後ろから何かいると、孝之は感じた。

「嘘……だろ」

そういいながら、孝之は後ろを振り向く、長い体に足がモジャモジャとついている、して、先ほど人を食ったかのように血が口元についていた。

「やばいかな」

恐怖で息が荒くなってきた。逃げようにも足が一步ずつしか動かない、一步また一步と後ろに交代していく、後退していくと何かにぶつかった。後ろを見える、木が生えていた。でっかい木だ。

「死にたく……ないよ」

そう言った。妖怪に追い詰められ、恐怖で孝之の呼吸がさらに乱

れてきた。生きたいと、生きて色んな人に出会いたいと、父さんと母さんに自分が無事だよって笑顔で言いたくて、とめどなく涙があふれだし、叫んだ。

「まだ俺は生きたいんだ！ だからくるなああああ！」

叫んだ。大きく叫んぶ、森の木がざわめき始める。森の周辺に孝之の声が響き渡った。その声に反応したかのように、妖怪が飛び掛った。

1日前

転生してから7年の歳月が過ぎた。

河野孝之は、飯野孝之に転生した。転生したて頃を思い出していた、したての頃はとにかく困ったものだった、オムツを替えてもらったり、母乳を飲ませてもらったりと、色々と恥ずかしい出来事があったが、慣れとは恐ろしいもので母乳を飲ませてもらったりオムツを変えてもらったりされとも、恥ずかしくなくなった。

そんな事を孝之が考えていると、母親の呼ぶ声が聞こえた。

「孝之ー、ご飯できたわよー!」

「ハーン」

孝之は力なく返事をする。

「今日は焼き魚と納豆よ」

母親である麻衣が今日の晩御飯の内容を言う。その内容に孝之は腹がぐぐつとなる音が聞こえた。麻衣が作る料理は絶品で、とてもおいしいからである。

「いただきます」

麻衣と孝之は声を合わせてそう言った。

「母さん、今日は父さん遅いね」

孝之は麻衣に言った。いつもなら晩御飯までには帰ってくるはず

なのだが、今日は何かあったのだろうか、そう心配してしまう。

「ほんとに遅いねわね、ねね孝之、ご飯を食べ終わったら、お父さんを呼んできてくれないかしら」

優しい口調で麻衣がそう言った。

すぐ近くに父親である初春が経営している店があるので、別に断る理由がなかった。モチロン少しでも遠かったら断ってはいたが。

「分かったよ、母さん」

そう言ったあと、孝之はご飯を急いで食べた。

「ごちそうさまでした」

孝之はそう言い、麻衣も孝之がごちそうさまでしたと言ったので麻衣も言う。

「それじゃあ、ちょっと行って来るねー」

「気をつけてね」

「はい！ 気をつけていつてきまーす！」

孝之はそう言って、家を出た。空を見上げれば完璧に夜になっている、孝之は少々怖くなってきたので、孝之は知りだした。

” feels like HEAVEN ” を鼻歌で歌いながら初春の店に向かう、走っていたら孝之はとある事に気がついた、自分の足音とは違う足音が後ろから聞こえるのだ。

「冗談はヨシコさんだZ E ?」

アホなことを言いながら後ろに振り向いた。

「誰もいないか……気のせいかな」

孝之はふうつと息をついた、そして歩き初めて数分たった頃か、また後ろから足音が聞こえた。さすがに背筋がゾットした。

「誰もいませんよね？」

そう後ろに振り返って見たものは、脂ぎった顔の男が、何かを振り下ろす姿だった。驚いた孝之は腕で顔を守ろうとしたが、間に合わず意識が飛んだ。

「ここはいつたい何処なんだ」

目を覚ました孝之は、一人そう呟く。周り暗く見渡してみるが誰もいない、周りには木がいっぱいならんでいた、たぶん何処かの森なんだろうと、そう孝之は思った。そして、何故意識を失ったのかを思い出そうと目を閉じた。

（確か父さんと呼びに行こうとして、家を出た、それから確か……痛いつ！）

頭に突然痛みがはしった、それで何で意識を失ったのかを思い出さず、自分は何かに襲われて意識を失ったんだ、これってもしかなくとも誘拐だよな、そう孝之は確信した。バキっと言う枝を踏んだような音がした。

「誰か……いるのか」

恐怖で気づかないうちに言葉を発していた。

「起きたんだね」

暗闇の森の中から声が聞こえた。

孝之は目を開き言葉を発した場所を見ると、脂ぎった顔に丸く太った体の男が出てきた。

気持ち悪い。孝之はそう思った。

「孝之ちゃん」

鼻息が荒くして、気持ち悪い声で孝之を呼んだ。呼ばれたことに不快感を感じながら、何となくこいつが自分をこんな所に連れてきた犯人だろうと確信する。孝之は、その気持ち悪い犯人を睨みつけながら言った。

「何故俺の名前を知ってるんだ」

孝之は睨みながら何故自分の名前を知っているのか聞いた。

「ハハハハハ、睨みつけないでよ孝之ちゃん、お兄さん少し興奮しちゃうよ」

少々この犯人は性癖がおかしいと孝之は判断した、そして、何故自分を連れてきたのか何となく分かった感じがした。

「なんで知ってるか知りたいんだっけ、教えてあげてもいいけど、僕の言う事を聞いてくれたらね」

聞かないでも分かる、先ほど思ったとおりだった、これから何をされるとか、そういうことを覚悟する。本当に気持ち悪くて吐きそうだ。孝之は犯人に言った。

「聞きたくない、お前の言う事なんて聞いてやらない」

そう孝之は言った、犯人は強がっているだろうと思ったのだろう、顔をニヤニヤさせながら、こちらを見てくる。、実際のところ孝之は本当に強がっているだけなのだが。

孝之はとある事を聞いた。

「ならココはどこなんだ。これぐらいなら教えてくれてもいいだろうっ?。」

犯人は口元をニヤニヤさせながら言った。

「ここは魔法の森だよ」

それを聞いて思った。ここが“魔法の森”という事は危ないと思った。初春と麻衣から“魔法の森”は危険だと何回も言われている。そして何か、よく分からないが“勘”みたいなのが働いた。こいつは明日の朝になったら死ぬと、そう頭によぎった。バカバカしいと孝之は首を横に振った。そんなことあるわけないと、自分の考えを否定した。どうも精神的に参ってるらしい。そう結論づけたら、急に眠気が襲ってきた。

「おや、眠たいんだね、お楽しみは明日に取っとくか、おやすみ」

犯人はそう言いながら孝之の近くで座り込んで寝ようとした。孝之は犯人が近くで寝る事なんてどうでもいいように、目を閉じ意識を手放した。

3時間30分前

「なにが、どうなって……」

孝之はそう呟いた。

何か叫ぶような悲鳴が聞こえて、目が覚めて起きたらこの状況、昨日頭によぎった事を思い出したが、実際に目の前で起きたことに呆然と見ていた、目の前では孝之を攫った犯人がでつかいム力デミたいな妖怪に食われて物言わぬ骸になってるの姿になっていた、体は裂かれ、臓器なぞを食い荒らされ、口からは血の泡を吹き出していた。周りには血が飛び散っている、孝之の顔に血がつく、鼻を突く、どうしようもない鉄臭い血臭、どうする事もできず足が震えて動かない。ただ孝之はその姿を、見ていることしかできなかった。

「逃げ……ないと」

孝之はそう呟き、震える足に何とか力を込める、まだ微妙に震えているが、立ち上がって走って逃げれるとそう思えた。

「早く立ち上がって逃げないと……まだ死にたくない」

逃げようとした時、ふと食っている妖怪と目が合ったような感じがした、妖怪が一時食うのを止める、こちらを見ている、食うから動くな、そう言われたような感じがした。孝之は後ずさりながら立ち上がり、急いで逃げた。

7歳児のスピードで妖怪から逃げられないのは分かる。分かるが、あのム力デミたいな妖怪だ、もしかしたら逃げれるかもしれない。

そう思った。

そして現在

「まだ俺は生きたいんだ！ だからくるなああああ！」

孝之は目を閉じた、あまりにも怖くて、本当にどうしようもなく、誰か助けてと、神様に祈った。

「死になさい」

声が響き渡った。その声が聞こえたと同時に、何かでかい音がした。まるで何かが爆発したような音が妖怪のほうから聞こえたのだ。

「小さな子供を食おうなんて馬鹿げた事をしてるわね」

頭に何かがのった。

「まあ、妖怪は人間を食うのが当たり前かもしれないけどね」

孝之は目を開けて声がした方向をみる。

「もう大丈夫だからね」

そこにいたのは金髪の女性で“カチャーシュ”をつけてたのが印象的だった。もそもそと妖怪が動く、どうやら死んでいなかった。

孝之の体がビクつと震えた、震えたがすぐに震えが収まった。金髪の女性が頭を撫でてくれたからだ。安心させるように、優しく優しく撫でてくれた。

「どうやら、まだ生きてたみたいね。待っててね」

そう言っ て女性は一歩前にでた。

「生きてる意識と理性が無くなった妖怪……まったく、無くなって
るなら潔く死んでくれたらマシなんだけどね」

一瞬だった、女性は自分の前方に人形を出現させて、紫色の何か
光るレーザー？みたいなものを発射させていた。レーザーのスピー

ドはとても速く。まだ幼い孝之には見えるはずもなかった。瀕死の妖怪に避けるすべはなく、体中がレーザーに貫かれ血飛沫と悲鳴をあげた。

その光景を見て孝之は緊張び糸がとれてしまったのか孝之は倒れてしまう。意識を失う前に聞こえた声は倒れた孝之を心配する金髪の女性の声だった。

嫌だ・・・（けっこうグロイ表現とがR15かもしれません）（改）（後書き）

どうでしょうか？

ちよつと色々と変更してみました。

いろいろとダメダメですよね。

どうも戦闘シーンとかは苦手です。

主人公が何を考えているとか表現するとか苦手ですね。

そのうちに主人公設定を載せますので見たい人は見てください。
ネタばれ注意ですけどね。

まだまだ小説を書くのは苦手ですけども、今後ともお願いします。

ご感想ととかお待ちしております。

NGシーン？ 適当な妄想で書いてみる

犯人が何で先に死んだのか （注意 これは本編に関係なし）

犯「ウホッ！いい妖怪！」

妖「オレオマエマルカジリ」

犯「アッー！」

謎の金髪女性が孝之に思ったこと（注意 これは本編に関係なし）

女性「（この子かわいいわ……この子を私の家に持ち帰って禁断の
プラトニック愛をオオオオオオオオオオオ！）プシャアアアアア」

鼻血が出る音

そして妖怪を倒してからの

孝「ちょwやめwアッー！」

その後、孝之の姿を見たものはいなかった。

編集してみた

謎の女性に魔法使い！（前書き）

謎の女性に助けられる

謎の女性魔法使い！

音がした。ズルズルと何かが這いずり回るような音が聞こえる。後ろに振り向いた、そこには内臓を食われ死んでいる一人の男と、ムカデみたいな妖怪がいた。孝之は逃げ回った。逃げて逃げて逃げ回ったのに、何故か逃げ回った先々にその光景がでる。どうしてもうしてどうして、そのムカデ妖怪がイキナリこちらに向かってきた。逃げようとしても、何故か足だけが金縛りにあつたみたいに動かない、だんだんと距離が縮まってくる、なんで、どうしても、頭にその言葉ばかりが思い浮かぶ、力がほしいよ、自分を守る力がほしいと、そう願った、願ったところでイキナリ自分を守るぐらいの力がでるわけもなく、その妖怪と自分との距離が0になり襲い掛かれた。

「うわあああああああ！」

「キャッ」

息が乱れてる、自分が何処にいるか辺りを見渡す、先ほどの光景は夢だったのか、そう思い、孝之は汗をかいてることに気づき額の汗をぬぐった。もう一度辺りを見渡してみた何か分厚い本とか人形がいつぱいある部屋にいるらしい、そして金髪の女性がすぐ近くにいた。

「大丈夫？　とてもうなされてたみたいけど」

声が掛かる、金髪の女性が言った

「あつ、はい、大丈夫です」

そう言葉を返した。

「そう、ならよかったわ」

安心したような顔で後ろに背を向ける。

「今、暖かい紅茶を入れたんだけど、飲める？　一応緑茶もあるけど？」

そう金髪の女性が聞いてきた。手元にはティーカップが握られている。どうやら孝之が子供なので紅茶が飲めるのかと聞いてるようだ。孝之は少し迷いながら答える。

「紅茶なら飲めますよ。それと、危ないところを助けていただきありがとうございます」

孝之は妖怪に殺されかけたところを、この女性に助けもらったのを思い出して礼を言った。女性はクスクスと笑いながら言った。

「別にいいわよ、私はただ歩いてたら、あなたが妖怪に襲われそうになったところを助けただけよ。ホントは、あなたの事を見捨てるつもりだったのよ。けど、何となく気紛れで助けただけよ」

そう金髪の女性は言った。孝之には何となく分かったことがあった。この女性は見捨てるつもりなんてなかった。その証拠に微妙に頬が赤くなっている、どうやら照れやのようだ。

「いえ、あなたに助けしてもらわなかったら、俺は死んでました。本当に助けてもらってありがとうございます」

ベットの上で頭を下げてお礼を言う。女性は、また微妙に頬が赤くなり、無言で紅茶が入ったティーカップを渡してくれた。

「ありがとうございます」

ティーカップに入れられてる紅茶からは湯気が出ていた。ちよつと飲んでみて、ちよつと熱いかもって思いながらも、この紅茶おいしいなって、そう孝之は思えた。

「私の名前は、アリス・マーガトロイド、魔法使いよ、アリスって呼んでちょうだい」

孝之がちびちびと紅茶を飲んでいたら、金髪の女性が自己紹介をした。そして、アリス・マーガトロイド。そして魔法使い、その名前に何か聞き覚えがあったが、気のせいだと思い、孝之は自分の自己紹介をした。

「俺の名前は飯野孝之って言います。アリスさんの呼びやすいように呼んでください」

そうニコヤカに挨拶をした。

「なら孝之って呼ばせてもらっわね。よろしくね、孝之」

そう言って握手を求めてきた。手を出してきたので、少々びっくりしたが、すぐに手を握って握手をした。

「ねえ、孝之、少し聞いていいかしら」

遠慮気味にアリスが孝之に問いかけた。

「どうして、孝之は、あんなところにいたの？ 妖怪に襲われてたし、孝之は子供だから、普通は人里にいるとおもっただけど……教えてくれないかしら」

できるだけ優しくアリスは孝之に聞いた。その言葉を聞いた孝之はどうして人里からでて魔法の森にいたのか、どうして妖怪に教わってたのか、理由を話した。アリスは、少し悲しそうな顔をしながら、孝之の頭を手を置いた。

「私が明日必ず、あなたを人里まで送ってあげるわ」

そう言われながら頭を撫でられた、涙が出た。父さんと母さんにもう一度会えるんだという涙、そして、自分はちゃんと生きてるんだという涙。

「よしよし、辛かったわね。安心していいのよ」

アリスが孝之の頭をギュッ自分の体で包み込む。

「今は寝なさい、孝之は少し疲れてるのよ。おやすみなさい」

そう言われると、自然に瞼が落ちていった。

「アリ……スさん、ありがと……」ぞい……ます」

孝之はそう言い、意識を手放した。

「んっ」

目が覚める、とても楽しい夢を見てたな、そうおもった。

「よっこいせつと、ってあれ？」

孝之は上半身を立ててベットから出ようとしたが、何故か動かなかった。そして、体に違和感があった。何かが抱きついてるような感覚、何かスーッと音が聞こえる、その音がする方向に首を傾けた

「なっ！」

驚いた、顔を傾けたら、アリスの寝顔をドアップで見ってしまったからだ。

顔が赤くなるのが分かる、どうしようもなく赤くなり、口をパクパクさせてしまう、寝顔をジックリと見るわけにはいけないので、目を閉じた。

（どうしよう……とっても恥ずかしいし……しかし、アリスさんって美人だよな）

孝之は、また顔が赤くなるのを承知でアリスの寝顔を見た。やっぱり顔が赤くなる、やっぱり恥ずかしいので目を閉じた。

（ダメだ……まともに顔が見れないよ）

いろんなことを考えようと頑張ってみるが、アリスの寝顔が忘れられないらしく、目を閉じてても、顔が赤くなるしまつ、そして一番意識をしてはいけないことをしてしまった孝之。それは。

（アリスさんの寝息が首に当たってるしー！）

こうして一人で悶々とした時間はアリスが起きるまで続いたとき。

謎の女性魔法使い！（後書き）

どうだったでしょうか少々頑張ってみました。

レビュー感想またはアドバイスなどをお待ちしております。

もしものお話（注意 ここから下にある話は本編とは関係ありません）

アリスがもし変態だったら

ア「私はアリス・マーガトロイよ、趣味はあなたのような子供を攫う事かな」

孝「えっ！」

ア「さあ、虜になりなさい！」

孝「アッー！」

アリスがもしも妖怪が孝之を襲ってないと判断して素通りしたら。

（壊）

孝「死にたくない」

妖「オマエオシリマルカジリ」

孝「ウホッ！いいようかアッー！」

編集してみた。

いざ門番に！そして、チルノとの出会い。（前書き）

いろいろありました。

以上

いざ門番に！そして、チルノとの出会い。

「あたいはね最強なんだよ！」

孝之におんぶしてもらってる妖精のチルノは、そんな事をいった。そうなんだ、すごいねーっと、適当に答える。しかし、微妙に重い。7歳児なので筋力があまりないのは当然なのだが、なんとなく口に出して重いとは言わない。言ったら命が消えそうだからだ。

「へへーん、すごいでしょう！」

誇らしげにチルノは言った。孝之はため息をつく、チルノと仲良くなれた事は嬉しいが、背中が冷たい、どうしようもなく冷たい、体が寒さで微妙に震える。

「あ、そこ真っ直ぐね、もうすぐつくよ！」

チルノは元気よく言う、チルノは元気だなーっと思いつつ、孝之は足を動かした。目指すは紅魔館の門番。紅 美鈴に会うために。

数時間前

あの誘拐騒ぎから早1ヶ月、孝之が人里に帰ってきた時は人里の皆は大騒ぎだった。母親の麻衣と父親の初春には泣かれた。孝之もその姿を見てグワつと何かこみ上げてくるものがあつたが我慢した。孝之は、あの夜に、何があつたかを話した、誘拐されたり、妖怪に襲われかけたところを、アリスに救われた事なを話した。その話を聞いて孝之の両親は暴走、もといお礼をしようとした。

すぐ隣にいるアリスに、麻衣と初春が抱きつきお礼を言い始める、そして、初春が、宴会をするぞー！ と周りを盛り上げ始めて、飯野家で大きな宴会が開かれた。

アリスは、少し嫌がつてはいたけども、宴会をし始めたら、楽しそうにニコニコと笑っていたのでよかったのだらう。宴会が一夜あけて孝之の目が覚めたら、アリスに抱きつかれてるのはいい思い出だらう。なぜ抱いて寝るんですかと聞いたら、抱いて寝ると心地よいからという事らしい

アリスが人里から魔法の森に帰る時、とある人形とお守りとアリス館までの道のりを書かれたメモを渡された。

何でも、人形とお守りには、アリスの魔力が込められており、妖怪避けになるとの事、暇な時に遊びにきてねと言われた。

誘拐事件のことを思い出しながら、アリスの家でため息をつく、何故アリスの家にいるかという、アリス家に4泊5日の予定で泊りにきてるからだ。

「どうも、暇だな」

孝之はそう呟く、アリスの家には色々な本が置いてある、前までは童話から色んな小説類の本までいろいろあったのだが、今では、魔法書から魔術書そして魔道書まで置いてあるのだ。

アリスが魔道書とかを普通に置くようになったのは理由があった。アリスの家に約5回ほど遊びに来たときだっただろうか？ アリスがでかけるので家でちょっと留守番をしていたのだが、暇になって本を読んでいたのだが、何回もアリスの家に来てるので、だいたいの本は読破していた。

孝之は、違う本はないのかと探し始めたら、地面に何かが落ちたのだ。とてつもなく分厚そうな本でレメゲトン（Lemegeton）そう書かれていた。

何となく、その本を拾った孝之は、アリスが帰ってくるまでその本を読んでいた。アリスが帰ってきた事にも気づかず、本に没頭していた孝之だった。アリスは孝之に声をかけて、それは魔法書よっと言ったのだ。

孝之は魔法書を読むのは危ないの？って聞いたら、危ないと答えられた。たしか、魔法書とかは一般人が読むと発狂して死に至ってしまうらしい、普通に読める人は魔力がある人だけらしい。

そして、それ以降、魔道書から魔法書そして魔術書まで普通に置き始めたのだ。時々アリスは人里にきて孝之の母親と父親にとある話をしているのを孝之は知らない。そして、後で俺が読んでたのが魔法書って分かったのって聞いたら覗き込んだと、アリスが孝之に教えたのだった。

少し回想が長くなったが、孝之は本当に困っていた。

「うーんうーん、アリスさんは、用事で人里に行ってるしな、俺も何処か出かけるかな」

少々悩んだ結果、お出かけする事に決めた。

「しかし、何処に行くかな、迷うな」

そつづくさ言いながら何処に行くか迷っていた。ここから出かけるにしても行き先を決めない事にはどうにもならない。

3分ぐらい悩んで、とあることをひらめく。何かを思い出したような顔だった。これなら色々と一石二鳥だと、孝之は思った。

「あとは、適当な紙に書いてテーブルの上におくか」

フムフムランフンフン　と意味分らない鼻歌を歌いながら、アリスにでかけますと置手紙を書く。

「よし！ 準備万端だ！」

そう言って、アリスの家を出た。

「おおー！ でけー！」

孝之の目の前にはでかい湖があった。水に濁りはなく、透き通っている。道中なにか金髪の女の子に食べられそうになるハプニングがあったが、なんとかここまでたどり着けたようだ。孝之は湖に足を入れてみた。

「冷たいけど、気持ちいいなー！」

テンションがつついっ上がってしまい、大声で叫んでいた。ミスったと思い、口を押さえて周りを見渡す、だがすでに遅く湖の向こう側から結構早いスピードでこちらに何かに向かってくる。

向かってくる物体を見る。背中に氷の翼が生えており、髪の色は水色？ あと服装は青色だった。昔の記憶を掘り起こす、氷の翼氷、そして思い出す。

「あれは、チルノなのか？」

どうも7年前の記憶だから自信なさげに呟く、あと2分か3分ほど考えられる時間があるのなら、完璧に思い出すことができるのだが、考える時間はなさそうだ。何故なら、すでに孝之の近くまで迫ってるからである。

「あたいの縄張りで何してるんだー！」

元気いっぱい可愛い声があたりいちめんにこだました。外見年齢的に10歳か11歳ぐらいの背丈ぐらい。

「何してるんだ、って言われてもね、ちょっと湖に足を入れて涼んでるだけなんだが」

孝之は冷静に話しをする。とりあえず孝之は、元気いっぱいの女の子にお菓子を上げて仲良くしようと思った。もしも、この子がチルノなら自分の目的地に案内してくれると思ったからである。お菓子といっても、お饅頭だが。

「お饅頭いる？」

孝之は、お饅頭を手に持って、女の子にいいのかい？ と勧めてみ

た。

「いるいる！　ちようだい！」

女の子が孝之のそばまできたので、渡した。饅頭を食べてる女の子に、孝之は自己紹介を試してみた。

「俺は飯野孝之って言うんだ。君の名前は？」

女の子にたずねてみた。

「あたいはチルノ！　よろしくね！」

そう女の子が言った。孝之は、やっぱりチルノだったかと思いつながら、チルノに頼みごとを試してみた。

「チルノもしよかったら紅い館のところに知っているなら案内してくれないかな？」

チルノは餡子入り饅頭を食べながら言った。

「いいよー！　あたい紅の館なら知ってるから案内してあげる！」

口元に餡子をつけながら大きな声で言った。その姿を見てカワイイ！　なんて思ったの孝之だけの秘密であった。

現在。

「やっとついたか」

やっとのこと紅魔館についた。館の色は紅く、目に悪いとそう孝之は思った。

「ここが紅い館だよ！　あたいったら優しい！」

それだつたら早く背中から降りてくれと、思ったが、チルノの笑顔で別に降りてもらわなくてもいいか、そう孝之は思ったのだ。

「しかしまあ、とつても紅いな、チルノ」

孝之はチルノに言った。

「そうだね、紅いね」

チルノもそう言った。どうも目に悪い感じがする。

「それじゃあ行きますか！」

孝之はそう言って紅魔館の門番のところに行った。

いざ門番に！そして、チルノとの出会い。（後書き）

いやねえ、深夜に書くななんてダメだな

たぶん誤字とかが多いと思いますし、そのうち編集すると思います。

感想とかアドバイスまたは批判などお待ちしております。

編集してみた

突撃！隣の……！（前書き）

アリスの家に泊まる。

暇なので一人でお出かけ。

チルノに出会う。

饅頭をあげたら、ちょっとだけ仲良くなれた。

紅魔館に続く道を案内してもらう。

紅魔館に到着。

安 先生……チルノが乗ってる背中が冷たいです。（ブワッ）

誰か文才をください。

以上です。

突撃！隣の……！

するどい風を切る音が聞こえた。銀色の閃光がチルノと孝之の顔の真横を通る。髪の毛が数髪舞った。後ろに振り返る、そこには寶石のように光り輝く銀色の髪を風でなびかせるメイド服を着たきれいな女の子がいた。

ズブリッと後ろから嫌な音が響くまるで肉に何か刺さる音だった。ドサッと音がする、孝之は振り向く先ほどまで眠っていた赤い髪の女性が銀色のナイフに貫かれ体から血を流し倒れていた。

その光景に、背筋がゾツとした。チルノは何が起きているのか把握できてないらしく、え？　何が起きたの？　そういう顔で、孝之の顔を見ている。

ジャリッと音がした。先ほどの銀髪の女の子がコチラに一步、また一步と歩み寄ってくる。孝之は動かない、孝之もチルノと同じで、何が起きたのか、把握しきれていないのだ。

とうとう距離が１メートルぐらいになる、その女の子は、倒れている女性を一瞥したあと、コチラに顔を向けて言った。

「ようこそ紅魔館へ、お嬢様があなたを歓迎しております」

10分前

一步一步歩いていく、スグそこには紅魔館がある、背中にはチルノがいる、とにかく前へ進む、ルビーのように赤い髪の女性が立っていた、孝之は、門の近くに立つてる人が紅　美鈴なのかな？　紅　美鈴なら、こちらの目的がはたせるんだけど、そんな事を考えながら、話しかける。

「すいませーん」

声を掛けてみる。何故か反応がない。もう一度孝之は声を掛けてみた。

「あー。すいませーん」

反応がない。

「おかしいな」

孝之はどうしたらいいのか考えようとしたら。

「孝之！」

チルノは大きめな声で孝之の名前を呼ぶ、少々耳がキーンとしたが、気にせずに、聞いた。

「どうしたの？」

孝之は言った。

「あの変な服を着ている妖怪、寝てるよー！」

そう大きな声で言った。やっぱり耳がキーンとしたが、チルノが言ってる事がホントなのか、よく見てみる。

「スピー、スピー」

どうやら完璧に寝ているようだ。立って寝るなんて凄い特技だなと思う、ごく丁寧に涎まで出ている。

「チルノありがとう」

孝之は女性が寝ている事を教えてくれたチルノにお礼を言った。チルノは少々照れた感じで、えへへっと笑った。そんなチルノを見て癒されながら、どうやって、眠っている女性がどうやって起きるのか考えようとした時にそれは起こった。

何かに見られるよう感覚がした。何かとてつもない何かに見られるような感覚。辺りをばっと見る、だが、なにもいなく、いるとしたならば、居眠りをしている女性だけだった。だが、その感覚が消えてくれない、もう一度だけ辺りを見てみる。

どこをみても誰もいない、なのにこの嫌な感覚が消えてくれなかった。孝之は気のせいだ、そう思い込みつつ寝ている女性にもう一度話しかけようと思って近づこうとした。

そして現在。

「え？」

孝之は声を上げた。目の前では銀髪の女の子が、コチラを見ながら、話しかけてくる。

「私についてきてください。ご案内します」

そう言って銀髪の女の子は、紅魔館の中に入っていきこうとした。
孝之は銀髪の女の子を呼び止める。あのナイフが刺さった女性は
大丈夫なのかと聞く。

「心配いりません」

その言葉を聞き何処か如何、心配ないのかが気になったが、ここ
にいても仕方がないので銀髪の女の子についていくことにしたの
だがチルノはどうやら中に入れてもらえないらしくしょうがないの
で、チルノにここで今日はさよならしようと言った。チルノは首を
横に振りなかなか降りてくれなかったが、また一緒に遊ぼうと約束
したら降りて帰っていき孝之は銀髪の女の子についていった。

孝之は気づかなかった。紅魔館に入っていく姿を、謎の金髪の女
に見られていることに、その女は、日傘を持ち扇みたいなので口元
を隠しつつ、その姿を消した。

紅魔館の中に入って、銀髪の女の子についていく、銀髪の女の子
にもう一度あの女性は大丈夫なのかと聞いてみたら。

「あの門番は妖怪ですので、心配しなくても大丈夫ですよ」

銀髪の女の子がそう言った。孝之はそういえば、チルノもそんなことを言っていたような感じがする。そう思い出していた。

孝之があのだれた女性の名前を聞いてみると。

「あの門番は紅　美鈴と言います」

どうやら紅　美鈴であつてたらしく紅魔館から出たら目的を達成させようと決意する。

適当に自己紹介をして、その銀髪の女の子の名前が分かった。銀髪の女の子は十六夜　咲夜と言うらしく、その名前を聞いて少々驚いた。十六夜　咲夜と言えばメイド長で、紅魔館に住む唯一の人間。紅魔館で炊事から洗濯そして戦闘まで一切を仕切る実質的な紅魔館の顔であるような存在だ。

色々と話していたら咲夜が立ち止まった。どうやら目的地はここらしい。

「ここが、この紅魔館の主である、レミリア・スカーレットお嬢様のお部屋でございます」

咲夜はそう言った。

何となく分かる……この扉の向こうには、永遠の紅い幼き月……レミリア・スカーレットがいると。この扉の向こうから何かよく分

からない威圧感。咲夜がドアをノックする。肩に力が入り緊張する。

「入りなさい」

扉の向こうから声が聞こえた。ギョッと音がなりながら扉が開く。

「失礼いたします」

咲夜がそう言って中に入り、孝之も失礼しますと言って部屋の中に入ってしまった

突撃！隣の……！（後書き）

疲れた……誤字とかあったらそのうち直します。

感想そしてアドバイスなどドシドシお願いします。

何となく考えたシーン（本編とは関係ないです）

もしも咲夜さんが大人だったら（咲夜さんは本編の設定では10歳です）

咲「（可愛い……おっもちかえりいいい！」

孝「ちよつとまわたすけてくれっえええええええ！」

その後、咲夜の部屋から孝之が出てくる事はなかった。

もしもブレイク中だったら

「ここが、この紅魔館の主である、レミリア・スカーレットお嬢様のお部屋でございます」

咲夜はそう言った。

何となく分かる……この扉の向こうには、永遠の紅い幼き月……レミリア・スカーレットがいると。この扉の向こうから何かよく分からない威圧感。咲夜がドアをノックする。肩に力が入り緊張する。「入りなさい」

扉の向こうから声が聞こえた。

ぎゅつと音がなりながら扉が開く。

「失礼いたします」

咲夜がそう言って中に入り、孝之も失礼しますと言って部屋の中に入ってしまった。

そして孝之はみた。

永遠の紅い幼き月の……レミリア・スカーレットの本当の性質を！
「ぎゃおー！たべちゃうぞー！」

その後、孝之が紅魔館に来ることはなかった。

編集してみた。

第5話 目的達成・・・？（前書き）

色々とありました

第5話 目的達成……？

目の前には椅子に座って優雅に紅茶を飲む幼女がいた。
その幼女は椅子から立ち上がりこう言った。

「私の名前はレミリア・スカーレット」

そうレミリアは言った。

「あなたの名前は？」

名前を尋ねた。この部屋には孝之と咲夜、そしてレミリアしかない、咲夜はレミリアの従者、必然的に孝之に聞いてることになる。孝之は緊張しながら言った。

「俺の名前は飯野孝之、孝之と呼んでください」

あまりにも緊張してしまい舌を嚙んでしまう。恥ずかしくなり顔を下に向ける孝之。その姿を見ていた咲夜とレミリアはクスクスと笑ってしまう。

「分かったわ、孝之と呼ぶことにするわ」

レミリアは口元に手を当てながら言った。孝之はどうも恥ずかしく未だに顔を上げられないでいた。レミリアは孝之に言った。

「顔を上げなさいた、孝之、こちらにきなさい」

レミリアは手招きをしながら咲夜をチラッと見た、その視線に気づいた咲夜はその場から消えた。そして、孝之はレミリアに言われたとおり近づく、レミリアの目の前まで近づく、するとレミリアは孝之に近づいた。あと1歩ほど歩けば顔と顔が接触するぐらいまで近づく、孝之は少し頬を染めて顔を下に向け、緊張する。

「ねえ孝之」

レミリアの手が孝之の頬に触れる、恥ずかしいくなる。だが顔をあげレミリアの顔を見た瞬間、背筋が凍る。何で背筋が凍ったのかが一瞬で分かった。恐怖だ。

「孝之」

レミリアはもう一度孝之の名前を呼ぶ、孝之は返事をしない、否、返事ができないのだ。最大級の恐怖が目の前にいる。妖怪に襲われて死にそうになった時の恐怖心よりも勝る、今のレミリアが何かを喋

ると何故か動けなくなる。目と目が合う、レミリアの目は紅く目を逸らせない、こんな事態に陥っているのに、レミリアの目はきれいだなと思えた。心臓の音が聞こえる。バックンバックンと音が鳴っているのが分かる、ゴクリ、唾を飲み込む音が聞こえる、孝之は知らず知らずのうちに唾を飲み込んでいたらしい、レミリアが視線をはずし孝之の首筋に視線を落とす。瞬間、頭に最大級の警報が鳴る。

「やめっ！」

声を出す、声を出せた事を奇跡といえるだろう。孝之は2歩3歩と後ろに下がる。

「ついた！」

4歩目、下がろうとしたのだが足をもつらせてしまい、後頭部を強打する。ごろごろと後頭部を抑えながら転がる。近くに合った椅子に今度は額をぶつけてしまい、額を押さえる。その姿を見たレミリアは爆笑した。

「プッ！」

レミリアの肩が震えている、笑いを堪えているのだろう、だが我慢できなかったのだろう、アハハハハとレミリアは笑い始めあも。笑いを提供している孝之本人は笑えない。もしも違う人が同じ事を

したならば孝之も笑うだろう。

「べつに笑わなくなっただけいいじゃないですか」

孝之は頭を手で押さえながら涙目になりながら言った。

「アハハハハハ、だってあなた面白いんですもの」

孝之はガツクリと肩を落としレミリアが笑い終わるのを待った。

「あゝ、面白かったわ」

レミリアは一頻り笑った後、そう言った。

「それで孝之、ちょっと聞いていいかしら」

レミリアが問う。

「あなたは何故、紅魔館に来たのかしら」

どうやらレミリアは孝之が紅魔館に訪れた理由を聞きたいようだ。レミリアに聞かれて紅魔館にきた理由を思い出す。

「えっとそのお」

孝之はなんて答えようかと考える、門番の美鈴に会いにきました。そんな事を言えない。実は孝之は美鈴と仲良くなるという目的があったのだが、目的が変わった、いや、目的は完璧に達成したといって良いだろう。美鈴と仲良くなり、ちよつとずつ紅魔館の住人と仲良くなる。それが孝之の真の目的であつた。

紅魔館の主であるレミリアとは少しだけ仲良くなれたと思う、レミリアと仲良くなつたら自然と紅魔館の住人と仲良くなれるだろう。孝之はそう思いつつ、適当に道に迷つたと嘘をついた。チルノとはあのでっかい湖で仲良くなり色んなところを案内してもらつていたと言つたら信じてくれた。

すぐに信じてくれたレミリアに心が痛んだ。友達じゃないまでも、ある程度仲良くなつたと思つている。そんなレミリアに嘘をつくのは少々心が痛む、そう孝之は感じた。

それから孝之とレミリアはお喋りをした。

「あら、夜になっちゃってるわね」

レミリアがそう言った。

「夜…だって…？」

孝之は思わずタメ口で聞き返してしまう。

「ええ夜になってるわ」

孝之は外を見る。暗い、とっても暗くなっていた。そして孝之はヤバイと思った。血の気が引く、アリスの説教はこっ酷く長い、とにかく長い、短くて1時間で長くて3時間ぐらい説教される。

「ごめんレミリアさん、俺帰るね！」

孝之は慌てて椅子から立ち上がり、レミリアの部屋から出ようとした。

「孝之、待ちなさい」

レミリアが引き止める、孝之は急いで帰らないとやばいので早口でレミリアにどうしたのと問う。

「あなた、今日はここで泊まっていきなさい。その魔法使いには咲夜が今日はココで泊まると説明させておくから」

先ほどお喋りしていた時に、レミリアの口からアリスの話題が出たのだ。孝之は少々驚きながらも、レミリアにアリスはお友達で今自分がアリスの家に泊まりにきてる事を告げていた。

「咲夜」

レミリアが咲夜と呟く。

「お呼びでしょうか、お嬢様」

イキナリ目の前に現れてレミリアに呼んだかと問う。

「ええ、呼んだわ」

そこからレミリア達の行動は早かった。咲夜をアリスの家に行かせて泊まらせる事を説明させ、孝之が眠る客室を用意する。ホントに早かった。そして1日が過ぎた。

第5話 目的達成・・・？（後書き）

ダメだ……ぐだぐだだ。

途中から完璧にネタ切れ、その場その場で考えてました。
そのうちこの話は編集します。

このような駄作ですが頑張って完結させようと思います。
激しい批判とアドバイスお待ちしております。

編集した。

外伝1 友のために助言（オリキャラが2名ほど出ます 本編では出る予定はあ

孝之には年の離れた人間の友達がいる。

名前は最上利昭。（もがみとしあき）

最初の出会いは最悪だった。

同じ年の友達と鬼ごっこをしていて孝之が少し余所見をして走っていたら利昭の男のシンボルに顔が当たり、利昭は余りの痛さに悶絶していたりする。孝之は孝之で顔に当たったのが男のシンボルだという事に気づくとオエエエエと言い出す。本当に最悪だったのだが、何故か仲良くなった。

孝之はため息をつく、その理由はすぐ隣にいる利昭のせいであった。

「たくよおー！ 雪のやつ……どうして俺の気持ちを分かってくれないんだ！」

何故か利昭の家で自棄酒につき合わされている。孝之は子供なので御茶なのだが。

「少しぐらい……俺の気持ちを分かってくれよおー！」

ドンツ！一升瓶を地面に強く置く音が辺りに響いた。

「なあ、孝之もそう思うだろ！」

ああ、すこしうつとうしいと思うがしょうがない、とりあえず落ち着けと言っておき、何故こんなに利昭が荒れたのかを孝之は思い出す、利昭には幼馴染がいる。名前は文野 雪花屋ふみのゆきでアルバイトをしているらしい。とりあえず、何でも利昭は小さい頃から雪に惚れていて何回アプローチしても気づいてもらえず、今日思い切って告白したらしいのだがあっさりと玉砕というより勘違いされたらしい。告白した時の言葉が確か。

「俺のためにずっと味噌汁を作ってくれないか！」

利昭がそう言ったら、雪がこう言われたらしいのだ。

「何言ってるの？ 利昭にいつも朝ごはん作ってあげてるじゃないの？」

それでそう言われて落ち込んでいたらしく、孝之は落ち込んでいるとはしらずに利昭を見つけて、現在に至ると。

「利昭さ、少し告白の仕方間違えたんじゃない？」

孝之はそう言いながら御茶を飲む、ほどよい温さの御茶はおいしいと感じながら、利昭の言葉を待つ。

「間違えたって、何が間違えたって言うんだよ！」

少々声を荒げて言う、お酒を飲んで少々キレやすくなっているようだ。

「だってな、雪さんがいつも味噌汁を作ってくれるんでしょ？」

利昭は頷きながら作ってくれと言った。利昭は一人暮らしで朝早く起きるのが苦手らしく、いつも雪に起こしい朝ごはんを作ってもらってるらしい。

「それって、雪さんには、こつ聞こえたんじゃないの？」

利昭は黙って孝之の言葉を聞く。

「朝起きるの苦手だから、これからもずっと朝飯を作りにきてほしい」

雪にはこう聞こえたはずだと、孝之は利昭に言った。利昭はなるほどなるほどと頷きながら言った。

「確かに、あの鈍感な雪ならありえるかもな」

うなづく利昭の言葉に孝之は雪さんって鈍感なのかよ！ と心の中で言う、とりあえず孝之は利昭に雪さんに想いを伝えられるかもしれない提案を試してみる。

「利昭、俺に提案がある。たぶんだけど、これで雪さんにも思いが伝わるはずだ」

利昭は期待の表情でこちらを見ていた。とりあえず孝之は言ってみた。

「とりあえず利昭、お前、今いくら持ってる」

利昭にお金をどれだけ持っているか聞いてみた。

「お金か……少し待っててくれ」

そう言った利昭はゴソゴソと押入れの中を探す。

4分後

「あゝあつたあつた、えっと、45貫ぐらいかな?」

孝之は利昭がそんなにお金を持っている事に驚いたが、先ほどの話を始める。

「とりあえず、ピンク色の胡蝶蘭を買え」

孝之はそう言った。今は夏だから花屋で胡蝶蘭ぐらい売っているだろうと孝之は考える。

「コチヨウラン?　なんだそれ?」

とりあえず孝之は説明する。

「言い方が変だぞ、胡蝶蘭だ。胡蝶蘭は花だ、胡蝶蘭の花言葉を分かるか？」

孝之は言った。利昭にさっき知った胡蝶蘭の花言葉なんて分かるはずもなく、分からないと利昭は言った。

「よく聞け、ピンク色の胡蝶蘭の花言葉は、あなたを愛します。だ」

その言葉を聞いた利昭は顔が赤くなる、見てるこっちが恥ずかしいほど赤くなり、とにかく孝之は言った。

「雪さんって花屋で働いてるんだろ？ とりあえず、雪さんの休日にも花屋に行ってピンクの胡蝶蘭を買うんだ」

孝之は言葉を続ける。

「それから、胡蝶蘭がなかった場合、カーネーションを買え、色は赤かピンクだ、黄色と濃赤はダメだぞあと白も、買った後は適当に呼び出して告白したらいいと思う、告白のセリフは自分で考えろ、そして最後に一つ、当たって砕けるだ。ついでにお前の家のお茶の葉は全て貰っていく」

孝之はニヤッと笑いながら御茶を飲む、利昭は孝之を呆然と見て

いた。

当日

利昭は緊張していた。とりあえず胡蝶蘭^{ピンク}は買えたのだが、告白するためのセリフがまだ考えられてない。どうしようどうしよう、そう思いながらも、今か今かと雪を待つ。今の利昭には1分が1時間ぐらいに感じ取れるであろう。タツタツタツと音がして前を見た。走ってこちらに近づいてくる一人の女性。雪だった。着物を着てコチラに手を振ってくる。

「利昭ー！」

大きな声で利昭を呼んだ。その声を聞いてドキつとする。雪の声をきくだけでこんなにドキドキするなんて相当雪が好きなんだなと思った。

雪が近づいてきて、利昭に聞いた。

「どうしたの、いきなり呼び出すなんて、何かあったの？」

雪に聴かれた瞬間、利昭は心臓が飛び出そうになる、頭の中が真っ白になった。何を言うのか考えていたはずの言葉を全て忘れてしまった。

利昭は焦ってしまい無言で手に持っていた胡蝶蘭を前に差し出した。利昭はしまった。そう思ってしまった。

雪は無言でその花を見る。利昭は怖くなった。雪は何も言わず無言で花を見ている。せめて反応があれば何か言えるのだが、腹を括り雪に声をかけようとした。

「この花を……わたしに？」

利昭が言葉を発するよりも先に、雪が発した。利昭は首を縦に振った。

「花言葉……知ってるの？」

気のせいかな、雪の声は震えている、そう利昭は思った。

「あなたを愛します」

花言葉だけを利昭が言った。胡蝶蘭の花言葉はあなたを愛します。その言葉がそのまま告白に繋がった。

「告白……なの？」

利昭は彼女の目を見ながら言った。

「告白だ」

そう言った、後はただただ雪の返事を聞くため黙った。利昭はそれ以上喋らない、そして、雪が言った。

「告白なら、返事しないとね」

利昭は聞く、心臓の音がスゴクうるさい、唾の飲み込む音も聞こえる。たった1秒が遅く感じる。思わず目を閉じてしまう、怖くてたまらない、振られたらどうするんだ、振られるに決まっている、そんな嫌な事ばかり考えてしまう、10秒または1分ほどだろうか、時間が分らない、利昭は目を開いた。そこには涙を流しながら口を開く雪の姿があった。

「わたしは、利昭のことが……」

風が駆け抜け胡蝶蘭の花が一枚舞った。

その日、幻想卿に新たな一組のカップルができたのである。

外伝1 友のために助言（オリキャラが2名ほど出ます 本編では出る予定はあ

なんとなく書いてみた。

後悔はしてるが公開はする。

雪の髪の色は黒

あとは想像にお任せします

利昭の髪の色は茶髪

あとは想像にお任せします

はぁゝ

かよ（前書き）

紅魔館に泊まりました

そしてこの話は色々挑戦してみた。

はあ　　かよ

紅魔館に泊まってから数ヶ月たった。

紅魔館の住人達とは仲良くできて、特に仲が良くなったのは美鈴だった。

孝之が紅魔館に遊びに行ったら必ずと言っていいほど美鈴と話をする。おもに世間話と美鈴の愚痴であるが。

孝之は家にいた

「つまらないな」

呟きため息をはきながら布団の上でゴロゴロする。

「まじですることないな」

足をバタつかせてから何かを思い出す。

そういえば、今日はアリスさんに家に泊まりきなさいって言われて泊まりに行くんだっけな。孝之は思い出しお守りと人形の準備しようとした。

「孝之、何独り言をブツブツ言ってるの？ 昼ごはんできたわよー」

母親の麻衣に声をかけられる、いきなり声をかけられ驚く、部屋の襖が開く音はしなかったはずなのに、何故か部屋にいるという、我が母君ながら末恐ろしい、アホな事を考えながら返事をする。

「はーい」

返事をしてから立ち上がり、飯を食いにいく。

食卓には初春と麻衣がいて、すでに座っている。

「孝之、早く座りなさい」

父親の初春が急かす、そんなに腹が減ってるのかと思い、席に座る。

「それじゃあ、手を合わせて、いただきます！」

麻衣のその言葉と同時に初春と孝之が「いただきます」と言った。

どうやら昼は冷や蕎麦んのようだった。

よくまあ寒いのに作るなあ、そう思いながらも蕎麦をズルズルと食べる。

「母さん、美味しいよ」

孝之がそう言つと麻衣は微笑みながら蕎麦を食べる。

麻衣は口いっぱい蕎麦を入れる。その様子は宛らそれはハムスターのようだった。

「母さん、ちよつとはしたないよ、ゆつくり嚙んで食べようよ」

孝之はそう言つた後、熱いお茶を飲む、そう指摘された麻衣はすこし落ち着き嚙んで食べる。

「うゝ、いいじゃない、べつに減るもんじゃなしさあ」

麻衣が言つた。確かに減るもんじゃないけどあ、そう言いながら蕎麦を食べる。

「ごちそうさまでした」

初春がそう言つた。孝之もちょうど食べ終わったので御茶をすすりながら言つた。

「ごちそうさまでした！」

麻衣はまだ蕎麦を食べているようで、口をもぐもぐさせながら急いで食べている。孝之は麻衣と初春に言つた

「父さん母さん、アリスさんの家に泊まりに行く約束してたから行ってくるねー！」

孝之は言つた。初春は苦笑いしながら言つた

「アリスさんに迷惑かけるなよー」

「いっぺらつちゃーい」（いってらっしゃーい）

初春と麻衣が言つた。

「いってきまーす！」

孝之はそう言いながら、手ぶらで家を出た。

「ふああ」

欠伸をしながら魔法の森の中に入る。

最初の頃はびくびくしながら通ったものだな、それにアリスさんの家まで結構遠いんだよなあ、内心そう呟きながらアリスの家に向かう。

「そういえば森の入り口に何か店みたいなのあったよな」

何か色々なものを置いてたし面白そうなものがありそうだな、孝之の勘がそう告げる。

「ん？」

孝之はとある事に気づいた。

「あれ……人形とお守り持ってきてない？」

慌ててポケットなど色んなところを探す。

孝之は冷静に目を閉じ考えとある決断をする。

「家に取りに戻るうか、地図も忘れてるっぽいし」

孝之は最初の道のりなら暗記しているのだが、途中からは完璧に覚えてなく、今気づいてよかった、知らないうちに行ってたら死んでたな、そう思った。

とりあえず一度家に帰ろうと後ろに振り向く。

何が起こったのか分からなかった。

後ろに振り向いたとたん突然尻に鋭い痛みが走ったのだ。振り返ってみる。

そこには“きもけーね”と化した寺子屋の先生がいたのだから。

「なんでけーね先生がw」

とりあえず。

「ちょwなんでw」

とりあえず尻を押さえながら走る。

いったいなにが起きているのか分からないが、とにかく走る事だけを考える孝之。

人里が見える。

走り走って人里に入る。

「ついてきてない……よな？」

後ろを見てついてきてないか調べる。

「助かった……」

ふうつとため息をはき前を見る。

前を見た瞬間、孝之の体は硬直する。

「はっ？」

そこには袴姿でこちらを漢達がいた。

その漢達が、やらないかと叫びながら突っ込んできたのだ。

「ちょwおまw待てw何が起こっているのか説明をwアツーーーーー
ーーーー」

「アツーーーーー!!」

飛び起きる。息が荒い、とりあえず深呼吸をする。
だいぶ落ちきはじめた。

「ふうー、夢オチかよ」

とりあえず孝之は額の汗を拭い布団をかぶり寝た。

はあゝ

かよ（後書き）

消そうとおもいましたが、どんな駄作でも完結させる事に意味があると、誰かが言っていたので、とりあえず後半を書き直しました。

主人公設定あとその他（上白沢慧音と妹紅の言葉使いとか更新）（前書き）

本編で東方キャラが主人公に思っていることの

慧音と妹紅を更新

主人公設定あとその他（上白沢慧音と妹紅の言葉使いとか更新）

飯野孝之^{いいのたかゆき}7歳

種族：人間？

身長 133cm
体重 30kg

7歳児だけど身長体重が大きい

主人公の外見は……目は微妙に目つきが鋭い 糸目という設定があったが、力つと見開くと世界が滅びるという裏設定があったのでボツ

瞳の色は 濃褐色

髪の色は 黒

髪型 ロックテイストクールウルフ

体の色は 日本人と同じ感じの肌色

今のところこれぐらいしか考えてない。

東方の知識

東方紅魔郷ぐらいしか知らない。（作者はキャラとかなら大体知ってはいるが、口調そして性格などは余り知らない あと関係ないが 作者は東方紅魔郷しかプレイした事がない）

性格・特徴

けっこう頑張りやで女性と子供に意外と優しいのだが、ヤローに関しては優しくない（だがホントに困っていたりしたら優しくな

り助けたりするかも)

何かが起こるとすぐに対応できるが、予想外な事が起こるとめっちゃ混乱する事あり。

友達が多いほうだが友達とはあまり遊ばない。

いちおう寺子屋に通ったりするで慧音とは知り合い。よくサボるので慧音に頭突きをされる回数がダントツ1位。

主人公は勘が鋭くよく当たる。

そして回復力が尋常じゃないくらい早い。

主人公は魔法を使うためアリスに黙って魔法の勉強中 (じつはバレバレだったりもする) そのうち美鈴に弟子入りの (予定)

あとできたらパチュリーとアリスにも弟子入りさせたらさせたい (予定)

能力紹介

努力すればどんな力でも手に入れる程度の能力

その名のとおり努力をすればどんな力でも手に入る。

魔法を覚えるたり色々とすることができる。

じつさいには、それ相応の努力をしないと手に入らない。

運命を操る程度の能力とか時間を操る程度の能力とかを完璧に覚えるには400〜500年ぐらい努力しないと無理。

比較的に覚えやすい程度の能力は、魔法を扱う程度の能力とか気を使う程度の能力とかである。

だが誰かに師事すれば大幅に覚えるのが早くなる。

師事する人が多ければ多いほど早くなる。

老いる事も死ぬ事も無い程度の能力は努力しても無理、なぜなら薬を飲まないと覚えられないから。

程度の能力の習得情報

？魔法を使う程度の能力（扱う程度の能力） 今のところ努力しだけで、あと4年と10ヶ月で完璧に習得できる（主人公は一回だけ魔法を試そうと頑張ってみた結果 上手くいかず頭の髪の毛が燃えた まだまだ自由に扱う事はできない）

？人形を操る程度の能力 魔力を自由自在に扱えるようになるまで話にならない。

？気を使う程度の能力（覚えさせる予定）

本編で東方キャラが主人公に思っていること

アリスマーガトロイド：仲良しだが恋愛感情の類は皆無

チルノ：友達と誤っているらしい 孝之の背はチルノの特等席レミリア・スカーレット：面白い人間だと思っている反面、血を吸ってみたいとも思っているが、もしかしたら母性本能に目覚め……

十六夜 咲夜：弟ができたみたいにいる

上白沢 慧音：何かフラグがたっている？

藤原 妹紅：意外と楽しいやつ

上白沢慧音の言葉使いについて。

上白沢 慧音の言葉使いは寺子屋で居るときは少しばかり男口調になる。

寺子屋以外のところだと女口調になる。（寺子屋が教えが終わったら女口調になるが、やっぱり親しくならないと女口調にならない）

藤原 妹紅

俺の小説では妹紅は女口調です。

本編年表 微妙にネタバレ？

1989年	2月3日	十六夜 咲夜 生誕
1990年	7月4日	博麗 霊夢 生誕
	11月5日	霧雨 魔理沙 生誕
1992年	5月20日	飯野 孝之 生誕
1995年	十六夜 咲夜	レミリア・スカーレットに拾われる（このとき咲夜、両親がおらず孤児になっている）
1998年	12月7日	レミリア・スカーレット達が幻想郷に移住
1999年	8月26日	飯野孝之攫われる
	8月27日	アリスマーガトロイドに出会う。
	8月28日	孝之無事に生還する
	9月31日	チルノと紅魔館の住人に出会う。
2000年	3月4日	美鈴に弟子入りする。（予定）
2001年	10月3日	霧雨 魔理沙が霧雨家から勘当される
2003年	5月4日	博麗 霊夢がスペルカードルール制定を導入する
2003年	8月1日	紅い妖霧発生
	8月12日	紅霧異変発生（東方紅魔郷）

主人公設定あとその他（上白沢慧音と妹紅の言葉使いとか更新）（後書き）

東風谷 早苗って女子高生なのかな？ 全然わからないから本編年表にかけれない。

東方wikiをみて霊夢達の年齢とかを予想してみたんだが……全然わからない。

努力とは？（前書き）

今回は行間に気をつけてみた。

たぶん見やすくなってるはず。

努力とは？

“努力をしよう”

目が覚めたと同時に寺子屋の誰かから頭突きを食らった、とても痛かった、痛かったのだが、いきなりそんな言葉が頭に浮かんだ。何故“努力をしよう”と浮かんだのか、何故か知らないが努力をしたほうが良いと、頭の中の何かが告げているのだろう。

そしてまた額が痛くなった。痛みがだんだんと額に広がっていき悶絶してしまう。痛すぎて立ち上がれなくなる、どうやら頭突きをした女性も額を押さえながら唸っている。

「慧音先生……痛いですよ」

額を押さえながら孝之は言った、頭突きをした女性、上白沢 慧音が額を押さえ涙目で何か言おうとしている。

「いい加減に授業をしろ！ さっきから寝てばかりで私の授業を聞けないのか？」

「慧音先生、あれですよあれ、睡眠学習ですよ」

「屁理屈を言うな屁理屈を！」

「まあまあ、ちゃんと目が覚めましたので授業を始めましょうよ」

慧音は額を押さえぷりぷりと怒りながら授業を再開する、少々機嫌が悪そうだ。やはり先ほどの睡眠学習発言のせいだろうか。そんな事を考えながら慧音の話を聞かず孝之は考える。

どうしたら強くなれるのかを、転生する前に神様が言っていた事を思い出す。“努力すればどんな力でも手に入れる程度の能力”そんな事を言っていた。努力をすればどんな力でも手に入れる。努力とは何をすればいいのだろうか、全然分からない、努力をすればどんな力でも手に入る、努力すればするほど強くなるって事だろう。上限はあるのだろうかと考える、もしも上限がなければ、我武者羅に体を鍛え我武者羅に魔法を覚え我武者羅に探求していけばどんな妖怪でも一瞬で倒せるぐらいの力が手に入るのだろうか、けど無闇に今は努力しても意味がない感じがした。色々な考えが頭に浮かぶ。

「そおい！」

何か凄く額が痛い。そう言えば先ほど同じような事があったなと孝之は思った。

「慧音先生、額が痛くならないですか？」

「痛いに決まってる」

「ならどうして頭突きをしたんですか？」

「話しかけても一向に気づかないから」

額を押さえ言われる、どうやら声をかけられてたらしく、それに気づかない孝之にしようがなく頭突きをしたという事らしい。

「慧音先生、それで何か用ですか？」

孝之は尋ねる。

「いや、もうとつくに授業は終わっているのに、孝之が一向に帰ろうとしてなかったから、周りを見て、誰も居ないでしょう？ それで少し心配したのよ。何か悩みがあるなら相談に乗るよ？」

慧音は優しく微笑みそう言ってくれた。どうやら何か悩みがあるように見えてたらしい。周りを見ると誰も居ない、それに少しだけ薄暗くなってきた。どれだけ考えてたんだろうか、とりあ

えず孝之は気のせいだと言っておくことにした。

「悩み事なんてありませんよ、この年頃で悩み事があつたら将来禿げますよ」

面白そうに言ってみる。すると慧音は髪をかきあげる仕草をした。少しだけドキとしたのは孝之だけの秘密だ。

「孝之はホントに大人びてる。私がそれぐらいの頃は結構やんちゃだったのに」

慧音はそう言う、大人びてると言われてもねえ、これでも22歳ですから！ そんな事を思う。それよりも質問したい事があるので孝之は質問していいかと聞く。

「慧音先生、質問していいですか？」

「いいよ、私が答えられる質問なら答えてあげる」

どうやら良らしく孝之は質問する。

「じゃあ先生、どうすれば努力はできますか？」

「どうすれば努力ができるか……ね」

慧音は黙り込む、なんて答えたらいいのか迷っているのかな？

そんなことを思いながら慧音が喋るまでこちらは黙る。外の様子が気になる見てみる、気づけば外は夜になっていた。これは帰ったら説教されるかなと孝之は思っていた。

そして慧音が口を開く。

「難しい事は言えないけど、目標を見つけてみたらどうだろう」

「目標ですか？」

「そう、私が思うに、人は目標があれば努力ができと思う。それに、孝之にはまだ分らないと思うけど、努力しても成功するとは限らないんだ。けど、成功した人は必ず努力しているんだよ、私も努力している、孝之には目標を持って努力をしてほしいと私は願うよ」

綺麗な笑顔でそう言った。少しだけドキつとする。とりあえず分かった。ような感じがする。目標を持てば頑張って努力ができるという意味だろう。

「慧音先生、答えてくれてありがとうございます」

「いや、当然のことをしたまてだよ、別に礼なんてしなくてもいい」

慧音はそう言いながら孝之の頭をなでられた。少々照れくさくなってしまう。孝之は頬を染めながら帰る準備をする。

「さて、帰りますか」

「私も帰るから、家まで送るよ」

慧音も帰る準備をし一緒に帰ろうと欲してくる。孝之は何故か慧音を見るとドキドキと心臓の鼓動が早まるのを感じていた。慧音が右手の手を差し出してきた。手を握って歩こうと誘ってくれてるらしく、孝之の顔が何故か真っ赤になった。真っ赤の音が凄くドキドキしているのが分かる、孝之は慧音の手をギュッと握って家に帰っていった。

努力とは？（後書き）

できたてほやほやです。

1日1回は最新作を出すことに決めています。

超展開になっているやもしれません。

そのうち何回も編集したり話を消したりするかも。

感想とアドバイスあと批判などください。

とりあえずまだまだ完結はしませんが、完結は絶対にさせます。

完結させる事に意味があるのですから！

ボツ案集

「そうだ、私が思うにだ、人は目標があれば努力ができると思う。それに、孝之にはまだ分らないと思うか、努力しても成功するとは限らないんだ。けど、成功した人は必ず努力しているんだよ、私も努力している、孝之には目標を持って努力をしてほしいと私は願うよ」

「先生が努力を？ どんな努力をしてるのですか？」

「ああ、孝之、キミをどうやって私の突符「ハリケーンミキサー」

で掘るか考えていたところなんだ」

「えっ？」

孝之はその場で回れ右をし走ろうとしたが肩をつかまれ走り去る事ができない。振り向く、すると何故かハクタク化した“きもけーね”がういた。

「さあ、食らうがいい！」

突符「ハリケーンミキサー」

「ちょwアツーーーーーーー！」

人里中に広がった。その後、孝之とけーねは結婚したという。

慧音の家に……作者の知識があれなので慧音と妹紅がオリキャラみたいになっ

妹紅と慧音の言葉遣いが分かりません。

誰か教えてください――！！

慧音の家に……作者の知識があれなので慧音と妹紅がオリキャラみたいになって

「きりっつう！ れえい！ お疲れ様でしたあ！」

寺子屋の授業が終わり皆楽しそうに帰っていく、孝之は椅子に座ったまま帰っていく子供達を眺めながら考え事をしていた

（今日から一週間、一人暮らしが……少しめんどうだな）

流行り病で両親が体調を崩してしまい近くの病院で入院する事になったのだ。両親が退院するまで孝之は一人暮らしをすることになる。

飯を如何するか……家のお金は勝手に使えないしかと言って使わずに飯を食わないわけにはいけない、本当に困り果てていた孝之はとある事を思いつく。

“泊り”だった。泊りだったらお金を使わずに飯を食べれるから一石二鳥なのだが、泊まらせてくれるかどうかである。

（とりあえずアリスさんの家に理由を言って泊まらせてもらえるかどうか聞いてみよう、無理だったらレミリアさんに理由を言って泊まらせてもらえるかどうか交渉しよう。ダメだったらプチ一人暮らしをはじめよう）

孝之は深いため息をついてしまう。

「はあ」

「孝之、どうしたんだ？ 帰らないのか？」

慧音が話しかけてきた。孝之は深いため息をつきながら慧音に言う。

「ちょっとした事を考えてましてね」

「ちょっとしたこと？」

慧音は首を傾げる。とりあえず孝之は慧音に話す。

「慧音先生、明日から一週間ほど寺子屋を休みます」

「寺子屋に来ないのか？ 何かあったのか？」

慧音は驚き何か理由があるのかと孝之に聞いてくる。孝之は少々めんどくさいと思いつつも訳を話す

「あれです、今日から数日間ほど家に父さんと母さんがいないので、少し遠いところに住んでいる友達のところ泊まらせてもらおうかと思ったのです、だから先ほど慧音先生に休ませてくださいと言ったんです」

「なるほど、それで休ませてほしいと言ったのか。だがダメだ」

「えっ！」

孝之は少しショックを受ける、慧音だったらいいぞと言ってくれ
ると思っていたからだ。孝之はとりあえず考えないとなり、と思い
ながら考えようとする。

「そのかわりにだが、私の家に両親が帰ってくるまで泊まりにきた
らどうだ？」

「へっ？」

孝之は一度聞き返す。

「もういちどお願いします。どうも聞き逃しちゃって」

「しょうがないやつだな、だから私の家に泊まらないかと聞いたんだが」

どうやら慧音は泊まらないかと言ってくれてるらしく孝之にした
ら嬉しい事なのだが少々気になる事があつたの聞いた。

「慧音先生の家で泊まらせてくれるんですか？」

「そうだが、ああ、それと今私の友人が泊まりにきているんだが、
それでもいいか？」

「なるほどなるほど、別にいいですよ、泊めてもらえるのだから文
句なんてありませんよ」

「そうかそうか」

「それですね、やっぱり寺子屋に行かないと……」

「ダメに決まっているだろう？」

「チッ」

「こら！ 今舌打ちしたな！」

「いえ、全然そんな事はしてませんよ」

どうやら寺子屋にはちゃんと通わないとダメらしい、慧音の家に泊まる事は嬉しいのだが寺子屋に通うというのが少し嫌だった。要するにサボりたかったのだ。

「まあいいか、孝之どうする？ 私としては泊まってほしいのだが、ちゃんと返事が聞きたい」

「喜んで泊まらせていただきます」

「素直で宜しい。それじゃあ帰ろうか」

「はい、それじゃあ帰りましょうか、慧音先生と俺の愛の巣に」

そう言った瞬間顔を微妙に赤くした慧音に頭突きされる。慧音と孝之は額を押さえた。孝之は額を押さえながらも内心。

（っ痛……やばいな。慧音先生って楽しい）

とかなんとか思っていたりする。

「ここが私の家だ」

慧音はそう言った。とりあえず孝之は言った。

「ここが俺と慧音先せ「まだ言うか!」」

「グフオオ!」

辺りにズゴオン! という音が響き渡る。何故か全ての言葉を言わせてもらえなかった。額が痛い。慧音先生って面白いけど頭突きは嫌だな。ってか何で頭突きされたんだろう。孝之はそう思った。とりあえず痛みが引くまで額を擦りつつ、慧音の家の玄関に向かう孝之だったが、慧音の家の玄関が開かれ白髪の女性が現れた。

「なんかさっき凄い音がしたけど? 何の音? 慧音? そこで何頭を押さえてるの?」

目の前の女性がそう言った。白髪のロングヘアに深紅の瞳の長身の女性があり。髪には白地に赤の入った大きなリボンが一つと、毛先に小さなリボンを複数つけている。ファッションなのだろうか？
上は白のカッターシャツで、下は赤いもんべのようなズボンをサスペンダーで吊っており、その各所には何か護符みたいなのが貼られている。やっぱりファッションなのだろうか？

孝之はとりあえずその白髪の女性に自己紹介をすることにした。

「はじめまして、飯野孝之といいます。慧音先生の教え子です。孝之と呼んでください」

「はじめまして、ご丁寧にも、私は藤原 妹紅、適当に名前は呼んでくれてかまわないから、よく慧音からキミの話は聞いてるよ、孝之よろしく」

「よろしく、妹紅さんと呼びますね……所で慧音先生がよく話を聞くとは？」

「ああ、よく聞く話が、寺子屋で一二を争う悪戯好きの子供だが意外と努力家で誰にでも優しいけど寺子屋のとある子供と一緒に悪戯をされたら手がつけれないと……そんなところかな？」

「……何か嬉しいような嬉しくないような、とりあえず慧音先生は

良く寺子屋の子供達を見ていることがよく分かりました」

「キミも子供だろ」

妹紅が笑いなが言った。孝之も笑いながらも、確かに俺も含まれてますね、そう言って自己紹介を終えた。

慧音は先ほどの自分がした頭突きがまだ額が痛いのだろう、額を押さえながら孝之を涙目で睨む。

「なんか慧音先生が怖いです」

「孝之、慧音に何をしたの？」

「いや、あれですよ、俺が慧音先生の家を見てとある事をつ言たのが原因と思います」

孝之はそこで言葉を切る。慧音は未だに孝之を涙目で孝之を睨む。

「で、何を言ったのさ？ 慧音がここまで睨むなんてなかなかないと思うんだけど」

「ただ俺が、俺と慧音先生と一緒に住む家ですか！ と言ったんで

すよ。実際は“ここが俺と慧音先せ”の辺りで強制的に止められました。とりあえず思いつくかぎりではこのくらいです」

妹紅は不思議そうに頭を傾げていた。何処に怒る要素がるのかと考えていたのだが、その話を聞いた慧音は額と顔を赤くしながら慌てて孝之と妹紅に家に入ろうと言ってくる。

「えっ……あー、晩御飯を作って食べない？」

慧音が言った。晩御飯と言ったが時間的には16時ぐらいだろう。全然早い時間である。

「晩御飯って、まだまだ先じゃない」

「慧音先生ってこんなに晩御飯を食べるの早いのかな？」

「普通ならもう少し遅いんだけど、今日はやけに早いかな？」

慧音は顔を真っ赤にしながら無言で早足で家に入っていた。

「何を勘違いしてたのか知らないけど照れてたね」

「そうですね。何か慧音先生……照れてましたね」

そうお互いが言って妹紅と孝之は顔を合わせ同時に微笑み慧音の家に入っていた。

慧音の家に……作者の知識があれなので慧音と妹紅がオリキャラみたいになって何かごめん書きたいのに文書がなかなか思いつかなかった。

それにダメダメすぎる。

書きたい事とは違う事になっている。

批判または感想ください。

明日にでも編集などします。

主人公設定を後で編集しなおします。

作者は微妙にスランプ中です……とりあえず5月10日までは更新したいとおもいます。

慧音の日記？

（妹紅と慧音のしゃべり方が変だと思う人は主人公設定を見てく

スランプ状態から復活できない……とりあえず書いてみた。

そのうち編集とかするかも

慧音の日記？

（妹紅と慧音のしゃべり方が変だと思う人は主人公設定を見てく

孝之が慧音の家に泊まることになって早くも5日ほど過ぎていた。
今慧音の家いるのは孝之一人だけである。慧音と妹紅は買出しの
ため家を空けており孝之は留守番することになっているのである。

「はあ……暇だな」

孝之はつぶやく。

慧音の家で留守番することになって早くも2時間ほど経っている。
孝之は周りを見渡す、慧音の家には時間をつぶすものがない、本
などはあるが2日前に読破したもののばかりである。

慧音先生の机に何かないかな……そう思った孝之の目にとあるも
のが映る。

「これは……何だろう？」

孝之の目に映ったもの、それは何かのノートみたいなものだつた。
何のノート？　なのか興味をもち始めた孝之は手を伸ばす。勝手に
見たら怒られるのは重々承知なのだが本能には逆らえない。

「うん……体が勝手に動くんだから、俺は悪くないはずだ」

自分に言い訳をしながらノートを手に取り、そのノートを開く。

3月10日

今日2名の子供が寺子屋で勉強したいと言ってきた。名前は飯野孝之と遠野 俊之という名だった。両親に許可は取ってあるとのことだった。

寺子屋の子供たちに紹介するとすぐに仲良くなった。とても嬉しい。

「慧音先生の日記か……しかし行数とか少ないな……もつと見てみたろ」

孝之はそう言った。完璧に留守番をしていることを忘れているようである。孝之はノートに視線を移しだんだんと呼んでいく。

5月1日

今日も孝之と俊之がまた騒動を起こしてくれた。

これで18回目の騒動……いい加減に慣れたのかもしれない。

孝之と俊之が寺子屋に来た頃がとても懐かしい。

しかし、孝之と俊之は周りの子供たちとは違う感じがする。言葉にするなら精神年齢が高い。そう言えるのではないだろうか？

とりあえず罰として孝之と俊之に大人でも解くのが難しい問題を出した。期限は4日以内と言っておいた。今日はこれ以上書くのをやめておこう。

5月2日

家に帰る途中に孝之に出会った。

何でも母親が風邪で寝込んでしまったらしいから買い物にいくんだとか、良い子だと思ったが授業しているときも良い子でいてほしいと思ったよ。

私も買い物に付き合った。やっぱり孝之は良くできた子だ。なんとなく嬉しい。

5月3日

孝之と俊之は天才なのだろうか。

前に渡した宿題を提出してきたのだが、完璧だったの一言に尽きる。あの難しい問題をここまで解けるとは恐れ入る。

それにしても宿題の裏に書かれている絵は何なんだ私を怒らせたのかそれともからかっているのか判断がしにくい。

9月10日

今日の孝之が変だった。

よく溜息をついたりしているし、休み時間だと何時も騒がしいの

に何故か今日は騒がしくなかった。もし何か困っていることがあったら相談してほしいと私は思う。

今日はこれ以上、書く気がしない。

10月3日

何故だろうか、この頃孝之ばかりに目がいく。

それに孝之を見ると妙に心臓の音が煩くなる、どうしたのだろうか、私は何か病気でも患っているのかな？

しかし私は生まれてからずっと病気とかにかかった覚えはないんだけだな。

10月7日

孝之がこの頃、寺子屋に来なくなった。

どうしたんだろうか、とても心配だ。明日にでも孝之の両親に聞いてみようと思う。

アア孝之、君は何をしているんだ。

10月8日

とても心配だ。

孝之の両親に今日会ったのだが、どうやら孝之は魔法の森に住んでいる友達のところ泊まりに行ったりしているらしい。少しその友達がうらやましく思ってしまった。何故だろう？ とりあえず今日孝之は帰ってくるらしいので、明日からはちゃんと寺子屋に来ることだ。明日から孝之に会えると思うと嬉しい。

「……あの時の宿題があんなに難しかったのは罰だったのか……なるほどね、っと続き続きっと「それはそんなに面白いかな？」え？」

誰かの声がした瞬間、孝之の肩に何かが置かれる感触がした。

孝之は肩に置かれた何かを見る。それは手だった。とても綺麗な手だと思ったのだが手の甲から血管がめっちゃ浮き出ていたため綺麗とは言えなかった

後ろから何か凄い重圧を感じるのだが、というか振り向いたら何かのフラグが立つんじゃないかな……振り向いたら何かのフラグが立ってしまうと予感した孝之だったが、別に振り向かなくともフラグはすでに立っていた。

「孝之……君は何をしているのかな？」

「えっと、慧音先生の日記を見ました」

「ほうほう、それで……私の名前は何ですか？」

「上白沢慧音先生です」

「よくできました……さて、覚悟はできているかな？」

先ほど声をかけてきた人物……慧音が孝之に私刑宣告をした。孝之は後ろに振り向き慧音の顔を見る。

ああ、死んだな、これは……孝之は潔く諦めて、慧音の前で正座をする。

「良い覚悟だね。妹紅、鍋の準備はちよつとだけ一人でしてくれませんか？　すぐに私もしますから」

「わわわかった。す……すぐに来てね」

妹紅は少々震えながら鍋の準備をはじめめる。

「じゃあ……立ち上がって」

孝之は慧音の言うとおりに立ち上がる。

慧音が少し腰を低くして孝之と同じ目線になる、孝之と慧音の目線が合い1分ほど見つめあう。慧音が口を開く

「そんなに見つめないでほしい、照れてしまうから」

「へっ？」

予想外の一言に孝之はビックリするが、とりあえず孝之は目線をはずし妹紅を見る、妹紅はせつせと鍋の準備をしており、今は鍋の材料を切っていた。

孝之はふと妹紅のそんな後姿を見て。妹紅さんが俺の嫁さんになつてくれたらな……そんなことを思ってしまう。

妹紅は男性に尽くす系のタイプと孝之は予想している。孝之はもしも自分に尽くしてくれる妹紅の姿を妄想してしまい顔がにやけてしまう。

尽くしてくれる妹紅さんって意外といいかもしれない……。そう孝之は思ったのだが。

「……尽くしてくれる妹紅さんって意外といいかもしれない」

「何が尽くしてくれる妹紅さんって意外といいかもしれない……どいういう意味かな？」

「いや、何でもないです！」

どうやら小さく声に出してしまったようである、慧音の機嫌が悪くなる。孝之は全然理解できないではいたが一つだけ分かった事があった。

完璧に地雷を踏んだな……と。

「そうか……孝之、腹筋に力を入れる！」

「何でいきなり腹筋！」

いきなりの私刑宣告にビックリするが孝之は腹筋に力を入れる。目を瞑り衝撃が来るのを待つ。そして……。ドゴンッ！ 普通は出ない音が回りに響いた。

「ぶろあ！ 腹筋……かんけないじゃ……」

孝之は頭を抱え転げまわる。余りの痛さに足をバタつかせ涙が流れている。孝之が腹筋に力を入れる意味は無く、慧音は腹を殴らず頭に頭突きをしてきたのである。

「ふん！ 今日少し反省しなさい！」

孝之は余りの痛さにその場で気を失った。

孝之の今日の出来事

？慧音の日記を発見、見た後に慧音に頭突きでノックアウト。

？その日の慧音宅の鍋は寄せ鍋だったとの事である。孝之も目を覚ましちゃんと鍋を食べたとさ。

？両親の治りがまだ微妙に遅いためまた1週間ほど慧音宅で寝泊りすることになる孝之。

？妹紅の胸は意外と大きかった……（一緒に風呂を入ったため分かった）

慧音の日記？

（妹紅と慧音のしゃべり方が変だと思う人は主人公設定を見てく

あゝ……とりあえず最低な内容かもしれない

ぜんぜん何ていうか書きたい文がこゝ出てこないって感じで……。

感想などお待ちしております。

孝之が妹紅に妄想したこと

妹「あなた、あゝん」

孝「あゝん」

妹「あなた、お背中を流しにまいりました」

孝「ああ、頼むよ妹紅、嬉しいな」

妹「はい！ 私も嬉しいです！」

妹「あなた、愛してます」

孝「俺もだよ」

妹「あなた……」

こんなこと考えてる俺きめえ。

遅刻をした理由。(ある意味番外編？ とりあえず次話から一気に年数が飛び

スランプなおらんよ。

遅刻をした理由。(ある意味番外編? とりあえず次話から一気に年数が飛びま

「あつはつはつは！ 遅刻しちゃいましたー！」

人里にある寺子屋、その寺子屋で一人の子供と一人の大人が向かい合っている。向かい合っている人物は上白沢 慧音と飯野 孝之である。もちろん他の子供たちはいるのだが慧音の発するなにかに一人を除いてガタガタと震えている。

震えていない人物は遠野 俊之という人物で飯野 孝之の親友である。孝之は俊之をチラリと見る、俊之はニヤニヤしながら慧音と孝之を見ており孝之にたいしては、何か期待しているような目で見ている。

「孝之、理由は？」

慧音がめっちゃ良い笑顔で孝之に話しかける。良い笑顔なのだが孝之からしたら、その笑顔は目が笑ってない、青筋がピクピクと浮かんでいる、まさにその笑顔、般若の如くである。

何故怒られているのか、文章にすればたったの二文字、所謂『遅刻』である。普通の20分または1時間程度の遅刻だったら気をつ

ける程度の注意になるのだが、孝之の遅刻の場合……。

「私の記憶が正しければ孝之は朝早く起きて私より早く家を出たはずなんだが？　なのに昼過ぎに寺子屋に到着？　理由を聞かせもらおうか」

そう、孝之の場合は寺子屋の登校時間から5時間以上も遅れて来たのである。寺子屋も、もう終わりがけのところで孝之がやってきたのである。

「あー、遅刻した理由はですね……」

孝之は口を開き遅刻の理由を素直に言おうとしたのだが言いよどんでしまう。言いよどんでしまった理由、それは嘘の言い訳をしたほうが良いと直感めいたカンがそう言っていたからである。だから孝之は言いよどんだのだ。孝之は俊之を一瞬見る、俊之は何か面白そうな事を言えと言っているような期待しているぞ見たいな目でコチラを見ている。しょうがないな、そう孝之は心の中で思う。

「……実は」

「……実は？」

辺りに何故か緊張感が走る、慧音と孝之のいる景色が何故か皆には歪んでいる様に見えた。ゴクリと誰かが唾を飲み込む音が聞こえた。それを合図に孝之は嘘の理由を言った。

「俺が王族の人間だからです」

「……は？」

慧音の顔が面白いぐらい変な顔になる。というより何言ってるんだコイツ見たいな顔で孝之を見る。孝之は手を広げ演説するかのごとく大きな声で言った。

「今まで隠してきましたが、俺には帰るべき国があるのです。何故、我が王族が遅刻しなければならいかと言うと。第一国王であらせられたコウ様が4つの年をまたがれた時、お告げを受けたと言われています」

だんだんと孝之はテンションが上がるのを感じた。何故なのだろうか、凄く面白い、そう孝之は思った。

「四方に金と赤の光を射したもう、ハン様でした。「マ・ルドウ・ピチューン」と唱えられました。ハン様の額が赤く輝きますと、コウ様の御身はムチを打たれた仔馬のように開放され、熱い慈愛の波と共に、その頭には軽く風になびかん木々の如くたおやかな髪が広

がっていたのです」

慧音は何か戸惑っている様子だった。戸惑うというよりガタガタと震え何か怖いものを見るような目で孝之を見ていた。その様子を見て孝之は内心これはいける、そう確信した。だから孝之は続ける。
すつき説教をされないために。

「さて、この時、かのスタープ様はと言いますと寢所にて、芽吹きを待つ花のように安息の眠りについておられました、突如襲った胸の高鳴りに声をあげました「カンパニール……！！」と」

チラリと孝之は椅子に座っている俊之を見る、腹を右手で抱え机をバンバン叩きながら笑っている。

慧音は慧音で額に汗がうかんでおり何か言おうとしているのだが、その言おうとした言葉を遮らんとさらに続ける。

「あつあつ、あの、ちよつ「カンパニールとは我が国の言葉でして、つまり「来たれ神威の海、放たれよ尊崇」という言葉であり「すまないが、これから人と会う約束があるから、授業は終わりだ！」

慧音は脱兎の如くその場から立ち去ろうとしたのだが、孝之は慧音の服を掴む、何故ならば今逃げられたら慧音の家に帰ったとき、遅刻の原因を聞かれそうになったからだ。それに、まだ……。

「ハン様の説明がまだです」

孝之はまだまだ話が途中なので全部聞いてほしい、目的が二の次になってしまっている孝之であった。孝之は慧音の顔を覗き込む、慧音の顔は涙が滝のように流し鼻水もでていた。ちよつとやりすぎたかな？　なんて思ってしまったが、まだ物語りは終わってないからしょうがない、孝之は声に出さず心の中で呟いた。

「ハン様は「わかった！　わかったから遅刻の理由も聞かないから勘弁して！」……わかりました。ですが、また今度、遅刻したら続きを言いますからね、楽しみにしててください」

慧音は涙声でそう言った。その声に孝之は少々ドキドキしながらも冷静を装う。

「とりあえず、これで今日は終了かな？　慧音先生、お疲れ様でした。俊之いくぞ」

「了承したぞ。同士孝之よ」

孝之は寺子屋から出て行き、俊之も目に涙をうかべながら孝之の後に続き寺子屋から出て行った。

寺子屋の帰り道、夕日が昇り村をキラキラと照らす。まるで一つの芸術みたいな光景が孝之の目の前に広がる。孝之はこの光景を見ると何時も思う。転生できて……こんな光景を見れる俺は何て幸せなんだろう、そう思ってしまうのである。

「で、なんで遅刻したんだマイブラザー孝之よ」

「同士になった覚えはあるが、マイブラザーになった覚えはないぞ、俊之よ、まあ、なんで遅刻したかというとな……寺子屋の近くに道具屋「霧雨店」ってあるだろ？」

「ああ、確かにあるな、霧雨「道具店」大手の道具屋だな、そこで何をしてたのだマイブラザー孝之よ」

俊之が問いかけてくる。孝之が5時間も遅刻した理由、歩きながら俊之の質問に答える。それは……。

「霧雨店の一人娘の霧雨 魔梨沙って知ってるか？」

「霧雨 魔梨沙か……知ってるぞ、男勝りな口調、喋り方の特徴として語尾に「〜だぜ」「〜か？」をつける。ウェーブのかかった、金髪のロングヘアが特徴的。あと寺子屋には通ってない」

「ああその霧雨 魔梨沙で間違いないよ。って、どうしてそこまで知ってるんだよ？ もしかしてストーカー？」

「失礼なことを言うな。孝之、俺は情報を集めるのが好きなだけだ。それで、いい加減に教えてほしい」

「まあ、なんと言えはいいのやら。そうだな……分かりにくく言うならば子供は勉強が嫌いなんだ」

「なるほど……確かに嫌いだな、俺も勉強は嫌いだ、とりあえず今ので大体分かった。あれであろう？ 勉強はそっちのけで霧雨 魔梨沙と遊んでいた、そういうことだろ？」

「ああ、完璧だよ。^{パーフェクト} 俊之よく分かったな。分かりにくく言っただけから伝わらないと思ったんだがな」

まさか伝わるとは思っていなかった孝之は少しだけ驚く。

「話は変わるけどさ、なんで遅刻したぐらいで慧音先生は、あんなに怒ってたんだろう？ てか怖かったよマジで」

慧音のあの怒った顔を孝之は思い出し身震いする。最終的に攻守逆転で慧音がガクガク震えていたが逆転する前は孝之がブルブルガクガクと内心ではめっちゃくちゃ怯えていたのだ。

「ああ、とても心配してたからな、同士孝之の事を」

「俺の事を心配？ 何故に？」

何故心配なんてするのか。別に人里だから大丈夫だと孝之は思ってたのだが、少し考えて慧音が心配するような原因があった事を孝之は思い出す。

「オレがさらわれた時の事件か？」

「パーフェクト正解だ同士孝之よ。それで慧音先生は心配していたんだ。何回も寺子屋の授業中に孝之を探しに行こうとしてたしな、孝之が笑いながら遅刻したと言ったとき心配から怒りに変わったようだ。まあ、心配してたからこそ、その怒りも激しかったがな」

「そつか……慧音先生」

孝之は瞼を閉じて慧音先生を思い浮かべる。あんなに怒ってたのは心配してくれたからなんだと、孝之は淒く嬉しく感じられた。そして、慧音先生に謝ろうと孝之は決意する。

「つと、慧音先生の家に着いたな。ここでお別れだ、俊之」

「ん、わかった。また明日」

「おう、また明日」

俊之は手を振りながら帰っていく、孝之も手を振り慧音の家に入っていた。

孝之の今日の出来事。

？土下座して慧音先生に謝ったら笑いながら許してくれ……なかった。頭突き10発は流石にキツイデス。

？妹紅さんは今日は泊まらないらしい。なんでも喧嘩友達のところにいるとか。

？夜中に慧音先生の日記を見たら病んでるようなシーンがあったので忘れる事にした。

？夢の中で神様が現れた。少々この世界は東方の世界の歴史とはちよびつとだけ違うらしい。とりあえず謝る前に神様はその服装はやめたほうが良いです。生理的に受け付けない。あと神様が何か俺の隠された能力があるとの事だった。何の能力なのだろうか？

遅刻をした理由。(ある意味番外編? とりあえず次話から一気に年数が飛びま

スランプが治らない。

文章がうまく書けない。

最低だ……。

とりあえずデータが消えてしまったkら即興で作った。

批判など色々お待ちしております。

リアル……まじで忙しい。

「そういえば、あと三日ほどしたら孝之さんが私に弟子入り……というより門番隊に入ってから三年経ちますね」

場所は紅魔館の庭。

そこに孝之と美鈴が居て周りにはメイド妖精達が筋トレをしていた。孝之もメイド妖精の中で混じり腕立てをしている。

メイド妖精の背には二十キロぐらいの石が乗っていて孝之の背には美鈴が乗っかっている。

「いきなり……どうし……たんですか？ できたら……背から退いてくれると……嬉しいんですけど」

孝之は息を荒げ疲れた顔をしているが一定のスピードで腕立てしながら聞く。

「あと二十回ですから頑張りましょう。一応、後三日で門番隊に入つて三年目になるので御祝いでもしようかと思ひまして何か欲しい物ありますか？」

「あー、欲しい物ない……ので背から退いてくれると助かりますね」

息を整えながら孝之は返答する。孝之にしたら何もいらなから退いてほしいと思っっていたりする。

「……それで何が欲しいですか？」

美鈴は孝之の願いをスルーして再度孝之に何が欲しいかと聞く。孝之の背から退いてほしいという願いは却下されたようだ。孝之はスルーされた事がちよつとショックだったのだが、気を持ち直して美鈴に言った。

「腕立てが終わったら……考えますよ」

そこからたんたん回数数を数えていく。
やはり黙っているときのほうが腕立てに集中できる。

「……二十回と、はい百回終了です！ お疲れ様！」

美鈴はそう言つと孝之の背から降りる、それと同時に孝之はバタつと音を立て倒れる。

「やつぱ……美鈴さんの訓練……厳しいですよ。というより……子供の時から筋トレすると背が伸びないという……事になったりするという噂がですね」

息を整えつつ美鈴に言う。

「その事は大丈夫ですよ。パチュリー様が魔法で色々してくれますので安心してください。背は伸びますから」

ニコニコしながら美鈴は言った。孝之は遠まわしに訓練とかを易しめにしてくださいという事を言っ たつもりだったのだが美鈴は気づかなかつたようだ。

その事に孝之は落胆する。

「で、何か欲しい物とがありますか？」

息が整ってきたところで孝之は真剣に欲しい物といったら何がい
いのだろうかと考える。

（欲しい物ねー。慧音先生の日記帳……却下、そもそも慧音先生の日記帳なんて手に入らない。ならレミリア様の泣き顔の写真……カメラがないので却下だな。ならアリスさんのグリモアを……そもそも泥棒行為だから無理だろ。なら咲夜さんの銀ナイフ……咲夜さんに言ったら普通に貰えそうだから却下だなー。欲しい物……全部無理じゃん）

孝之の悩みまくっている姿を見て美鈴は何かを思いつき話しかける。

「そんなに悩まなくてもいいと思うんですけど……欲しい物がなければ孝之さんに丁度プレゼントしたいものがありますので、それでいいですか？」

その言葉に孝之はマジっすかの驚いた顔をしてしまう。孝之にしたら欲しい物はあるけど全部無理だという結論がでていて、美鈴の言葉は天から神が手を差し伸べてくれたの如く嬉しかった。

「マジですか！　というよりプレゼントってめっちゃ気になります！」

「ふふ、三日後に分かりますから楽しみにしてくださいね。それでは、また明日お会いしましょうねー」

美鈴は花が咲いたような綺麗な微笑みを浮かべながら未だに筋トレをしているメイド妖精の訓練に戻る。孝之はプレゼントの気になるがとりあえず空を飛び家に帰る事にした。

今回はこれで終わりです。短いですけど簡便を……スランプ状態な

ので文字など展開などは無視してください。

あと　にオマケ

「やっと人里の入り口が見えてきた……てか三時間ぐらい歩いてたからだるいわ」

紅魔館から人里まで三時間から四時間ぐらいかかる。空を飛んだら一時間で人里まで簡単に着くのだが……。

「まさかのガス欠って……まだ努力が足りないって事なのかなあー。ハァ」

孝之が紅魔館から人里に向かう途中に魔力が尽き地に落ちてしま
い、途中から歩きになってしまったのである。

「…っん！」

人里の入り口があと少しというところで誰か知ったような人達を発見する。孝之は手を上げ叫ぼうとしたのだが……やめた。

その人達が慧音と妹紅だからである。妹紅だけならば孝之は叫んでいたかもしれないが、慧音が一緒だと確実に孝之の額と慧音の額がゴツツン（言うなれば頭突き）するからである。というよりも何時も無断で慧音に黙って人里から出ていたため、慧音に見つかったらヤバイのである。

孝之は来た道を戻り遠回りして人里に入ろうと決意する。

「……触らぬ神に祟りなし……くわばらくわばら」

孝道はそう言つて慧音と妹紅に背を向け来た道に戻ろうとした瞬間、孝之に電流走る。

「孝之いいいいいいいいいいいいいいいいいい！」

「ちよつ！ 慧音ええええええ！ 手を離してええええええええ！」

どうやら背を向けて戻るのが遅かったらしく、慧音に見つかってしまつ。

爆走する慧音と慧音に引つ張られ宙に浮いてる妹紅が孝之にだんだん近づいてくる。まるでそのスピードは猛牛の如く。

「ちょ！ 待って！ 落ち着いて！ 落ち着いてください慧音先生！」

孝之は慧音のスピードに足が震えて動けなくなってしまう。

「待って！ 落ち着いてください！ だからおちついづはあああ！」

慧音の鋭いタックルが孝之の鳩尾を入り地面を抉るが如く倒れ、妹紅は顔面から凄い勢いで地面にダイブし死にかけている妹紅。

「もおおおお！ 心配したんだぞ！」

頭をグリグリと鳩尾に押し付け思いつきり体を締め付けられ苦悶の声を出す孝之と、意味不明な事を言いながら体をピクピクさせてる妹紅。

「ッゴホ……ゴホ！　ちょ……やめ……ガクッ」

「パタパタ……とりい……わたしは……とりい」

「これからあまり心配させないでほしい。せめて私に人里からちよつと出ると一言をだな言ってくれ……お前の事が心配で心配で」

という事が慧音が正気になるまで続いたらしいとのことであったとぞ。

外伝 美鈴からのプレゼント 前編 (展開が速いので注意というより本編が小

超スランプです！

が！ 私はこれを投稿します！

ガラスのハートの持ち主である俺だが批判でも何でもきやがれええええええい！

外伝 美鈴からのプレゼント 後編（美鈴からのプレゼントは外伝にします）

美鈴が自慢している花を見ながら、孝之と俊之は、咲夜から貰った弁当を食べていた。

「なるほど、それで今日、美鈴隊長からプレゼントを貰うとな、ふむ、なら俺もなにか送らないといけないではないか」

孝之は隣で弁当を食べながら何故か燃えている俊之に呆れてしまった。

「なにを呆れたような顔をしている、ブラザー孝之の記念日ならば、俺も祝うのが当然だろう？」

何を言ってるのだ、と言いながらやれやれと首を横に振る俊之に殺意が沸くが、祝ってくれることはとてもありがたいし、嬉しいものである。

「ふむ、ブラザーよ、五分ほど待ってくれ、すぐに持ってくる」
「へいへい、それよりも迷うなよ」

そう言々と箸と弁当を置いて何処かに行ってしまった。

俊之が何故、紅魔館を来れるようになったのか、それはレミリア

の気まぐれである。

レミリアが気まぐれで一人だけならば、紅魔館に招いても良いとの事で、孝之は俊之を招いたのである。

俊之は吃驚しているが、すぐに順応したのだ。

そして、あいつは天才なのであろうか、紅魔館に来てから直ぐに自分に能力があることを発覚し、紅魔館の門番隊に入ったのである。美鈴から武術を一年前に一緒に習っている、あいつが真面目にやっていたら直ぐにでも追いつかれ、追い抜かれるであろう。

どれくらい天才なのかというと、孝之が覚えるのに一ヶ月も苦勞して覚えた技を、俊之はたった五日で習得した。

孝之は本当に俊之の才能が羨ましくてしかたがない。

「あいつがちやんとしていたら……あいつの才能が羨ましく思えるな、そうは思いませんか、サボリ的美鈴さん」

「休み時間なので、此処にきました、ところで確かに羨ましく思えますね、ですが、彼のサボリ癖が駄目ですね」

気配を消しながら忍び寄ってきている美鈴に気づいた孝之は美鈴に話しかける、座ってもいいよと芝生をポンポンと叩いた。

「では失礼して……本当に羨ましいと思います、才能の塊、もし彼が真面目にしていたら、想像しただけで怖いです」

「ですよ、俺もそう思いま……す……なんです、それ」

隣に座った美鈴をチラリと孝之は見て言葉が詰まった。

美鈴がなにかでかい箱を持っていたからだ。

「あ、これですか？　これはですね、孝之さんへのプレゼントですよ」

ニコニコとそのままハイと渡されそうになった、だから、孝之は弁当箱と箸を置き、そのでかい箱を受け取った。

「開けていいですか？」

微笑みながら頷く美鈴に、孝之はでかい箱を開封した。

「なにか……な……ふう、気のせい気のせい」

すぐに閉めた。

（まさか予想よりはるか斜め上に行くとは美鈴さん……これプレゼントというよりパンドラの箱じゃないですか）

さしもの孝之も、美鈴から貰ったプレゼント……というよりもパンドラの箱にはビックリした。

「あれですか、処理できないから俺に任せたと、プレゼントじゃなくパンドラの箱を渡したと、そういうことですか、流石にあんな趣味ないですよ？」

「き……気のせいですが、ちょっと暇なときにしてたらできてたっていうか……私は忙しいので失礼します！」

「さっき休み時間って言いましたよね！」

そのまま脱兎の如く逃げていった美鈴に孝之は落ち込んでしまった。

まさかプレゼントという名のパンドラの箱を受け取る事になるとは思わなかったからだ。

「まさか……1/1スケールの咲夜さん人形、俺にどうしてほしいんですか、咲夜さんに殺されろとも言ってますか」

いなくなった美鈴に愚痴を言ってしまう孝之は仕方ない事だといえるだろう。

「食欲なくしてしまっただな……俊之が帰ってくるまで食べずに待っておこうかな」

耳を澄まして自然の音を聞く、孝之の癖の一種で、耳を澄まして周辺の音を聞くといい癖だ。

「本当にいい音がして」

「ちょ、咲夜さん、私になにかしましたか！」

「問答無用、貴方は死ぬのよ、今日ここで！」

なぜか美鈴の悲鳴と咲夜が怒り狂った声が聞こえたが、孝之は全てを無視と決め込む。

たとえ美鈴から貰ったプレゼントという名のパンドラの箱の位置がずれてても気にしない。

「今日は本当にいい日　　厄日なんだろうな」

孝之は本当に厄日だと思った。

まさか美鈴から始めて貰ったものが形見になるうえに、この調子だと俊之のプレゼントもなんとなく分かってしまう。

何故か遠くで、私はまだ死んでませんよおおお！　と聞こえたが気のせいだろう。

「先程、美鈴隊長の悲鳴が聞こえたが、なにかあったのか？」

「いや気のせいだろう、おかえり」

「ただいま、孝之よ、これが俺からのプレゼントだ」

俊之から貰ったのは美鈴から貰ったものより数十センチほど小さい箱だった。

（なんか嫌な予感がするな）

「どうしたんだブラザー？ 早く開けてみるがいい」

呼び方を統一しろと孝之は言いたかったが、とりあえずプレゼントを開けることにした。

嫌な予感しかなかったが。

「なるほどね、これは誰が作ったのかな？」

「俺だ」

（美鈴さんと俊之は同じだったか……駄目だこいつ……早く何とかしないと……）

俊之から貰ったものに孝之はなんとも言えない疲労感が襲ってきた。

「俺にこれをどうしろと？」

「いや、なに、前に作ったんだが、ふむ、後の処理は任せたぞ」

そう言った瞬間、俊之は走り去った。

「処分するのに困ったからね…… 1 / 1 魔理沙人形、はいはいワロスワロス…… 鍛錬はできなさそうだし帰ろう」

その後、孝之はでかい箱と小さい箱を持って帰って、人形を部屋に飾ったら、養豚場の豚を見るような目で見られたのは悲しい出来事だった。

後日ちゃんとしたプレゼント？を咲夜とレミリアとパチュリー＆小悪魔に貰った。

レミリアからはプレゼントと言うなの執事に命じられ、咲夜からは一発だけ叩かれメイド服を、そしてパチュリーと小悪魔からは魔術書を貰った。

パチュリーと小悪魔に一番感謝したのは言うまでもない。

さらにさらに妹紅と慧音が家に来て、慧音に「養豚場のブタでもみるかのように、冷たい目、残酷な目で……」「かわいそうだけど、あしたの朝には、お肉屋さんの店先にならぶ運命なのね」ってなんかんじで軽蔑されたが、妹紅は分かってくれて後日、俊之にお仕置きをしてくれた。

外伝 美鈴からのプレゼント 後編（美鈴からのプレゼントは外伝にします）

あー……言い訳はしない。

なんとも言うってください。

紅霧の異変にラブコールと大妖怪

「時刻は朝の8時か……暇だな」

飯野孝之宅

孝之は咲夜の人形を抱きながら部屋でゴロゴロしていた。
傍から見ればその様は変態と同じである。

「どうしようか、慧音先生からは家から出ると言われてるが…
…」

どうしたらいいのだろうか、咲夜人形の胸に顔を沈めながら孝之は悩む。

四日前ぐらいから慧音に自宅謹慎を申し付けられたのだ。
理由は人里に赤い霧が出始めたからだと言っていたが、孝之にしたら、霧の一つや二つどうしたのだと言いたい。

（だがまあ、妖霧だからなあ……ずっと当たってたらず普通は体に異常をきたすんだっけ？）

紅魔館の大図書館でそれらしいものを孝之は何回か読んだことがある。

（慣れていけば、別にいけるらしいが……紅魔館に行ってるせいか、耐性みたいなのがついてしまってるのかな？）

実のところ孝之は慧音の言いつけを守っていない。

霧にずっと当たっていても体に異常は見られないからだ。

そして霧を出しているのがレミリアである事も知っている。が、

慧音と両親、人里の皆には話していない。

霧を出している人物を知っているのは自分を除いて俊之と紅魔館の住人たちだけである。

（……紅魔館に行くか）

孝之は時計を確認し家を何時出るか決める。

（時刻は8時30分、父さん達には挨拶抜きで出ても大丈夫だろう、近頃あんまり心配されてないし）

孝之は咲夜人形を離し、黙って家を出た。

「……濃いな、霧が濃いよ、慧音先生に見つからないようにしない

と」

霧で覆われている人里を歩いていく孝之。

人が一人もいないので独り言などボロボロともれてしまうのは仕方がない。

孝之が歩いていると、孝之が良く知る女性、藤原 妹紅が歩いていた。

孝之に気づいたのか手を振りながら歩いてきている。

「おはよう。今日も誰かと遊ぶのかい？」

「おはようございます。この霧の中で誰と遊べというんですか、慧音先生の頭突きを食らう覚悟で遊ぶ人なんていませんよ」

孝之は妹紅にあいさつをする。

「いるじゃないか。孝之の親友である俊之が」

「残念ながら、あいつは昨日、香霖堂に行って本を読みに行くと行ってましたから……というより、注意しないんですか？」

「なんとなく孝之ならしそудなってね。別に注意をしようだなんて思っていないのだが」

なるほど、と孝之はうなづく。

少しだけ妹紅に自分の印象はどんななのか聞きたくなった孝之であるが、それは聞かないことにした。

「しかし、慧音に報告しないといけないのかな？」

「なにをですか？」

「出歩いていたことをかな？」

「勘弁してもらっていいですか？」

「慧音が煩そうだしなあ……そういえば最近美味しい団子売ってる店があるのだけど。一緒にどうかしら？」

これを言われて孝之はピンっときた。

つまり妹紅は遠まわしにこう言いたいのである。

「奢れ、子供に奢れというのですか……」

なんとという大人だ。と心の中で思ったりするのだが、そのような事は絶対に口が裂けても言えない。

言ったら最近流行りのスペルカードで燃やされてしまわないか知らない。

「いいじゃない、別に減るもんじゃないし」

「俺の貯金している金がなくなります……もっとべつのものとか無理かな？」

「……めっちゃ嫌ですけど仕方がないですね。今度奢りますよ」

そんなに私に奢りたくないのか、と言いそうな顔で孝之を妹紅は

睨む、が、孝之はそれを見なかったことにし、話を変える。

「そういえば近頃太陽の光が遮ってますよね。花とか大丈夫なのでしょうか？」

「……どうなんだろうね。太陽の光が無ければ花たちは元気にならないからね。しかし、どこの誰なんだろうね。幻想郷を包み込むような妖霧を作り出すなんて……私の感だと、相当の化け物と思うかな」

「……化け物、ですか？ そうなのですか？」

「化け物だと私は思うわよ。これは博麗の巫女が動いたとしても解決しないんじゃないのかしら？ 五分五分だけどね、それに慧音から聞いた話だけど、あの大妖怪である、風見 幽香が犯人探しをしてるらしいわね」

大妖怪、風見 幽香、これは幻想郷に住んでいるものならば一度は聞く名前である。

孝之はその風見 幽香の話は何度か聞いたことがあった。

DS、自分に仇名すものはすべて排除する妖怪、花を、特に向日葵をこよなく愛する妖怪。

ほかにも色々と噂がある、妹紅の言葉を聞いて、孝之は背筋がゾツとした。

（レミリア様……あの子のためだからってやりすぎたんじゃないんですか？ このままだと……家に帰って寝ようかな）

この霧を出している人物を知っているだけに、内心冷つとした孝

之であつた。

「俺はそろそろ行きますね」

「ふふっ……私は見回りを再開するよ」

それじゃあ、と軽く手を上げてもんぺのポケットに手を突っ込みながら、妹紅は消えていった。

「なんだろう、すごく嫌な予感しかしない。けど、慧音先生には言わないと約束したし、だいじょ……ああっ！」

孝之になにかすごく重要な事を見逃していることに気がついた。

「妹紅さんと約束してないじゃん……ただ奢る奢らないの話しただけじゃないか」

慧音先生からの強烈な説教を^{ミフコール}どつするべきか、と頭を抱えながら紅魔館を目指す孝之であつた。

（レミリア様、流石に霧が濃すぎます）

孝之の周りには見渡す限りの向日葵。

何時も通りに孝之は紅魔館を目指していたのだが、どこでどう間違えたのか、博麗神社周辺にある太陽の畑と呼ばれる場所まで、孝之は来てしまっていたのだ。

向日葵は元気がなく、一部が萎れていた。

向日葵を見ながら、孝之は今の現在位置を把握した。

（よりもよって風見 幽香が良く見かけられている場所、太陽の畑か）

風見 幽香が育てているであろう向日葵が咲き誇っている場所、太陽の畑、それが孝之の現在位置であった。

（……説教の事を考えながら目指していたからか？ しかし、考え事しながら紅魔館を目指す事はよくあるが……分からないな。うん、すべてあの人のせいだ）

妹紅さんのせいにしよう、それが孝之の出した結論であった。

（しかし、なにこれ……すっごく嫌な予感しかないんですけど）

今まで生きてて最高とも言えるぐらいの警報、所謂勘が、孝之にこの場から逃げると言っているのである。

「はやく行こう……嫌な予感しかない」

そう孝之が呟いた瞬間であった。

孝之の後ろからなにかジャリツと土を踏む音と、警報がやばいくらいに、脳内で響き渡った。

「その貴方、少しいいかしら？」

その言葉を聞いて、孝之は振り向きながら思ったことは。

（あ……俺死んだ？）

明るい服を着て、緑のショートボブに真紅の瞳。そして、傘であつた。

「ちょっと聞きたい事があるのだけれど」

孝之の目の前に、大妖怪である風見 幽香が佇んでいた。
自分の運を、孝之は呪った。

紅霧の異変にラブコールと大妖怪（後書き）

孝之「なん……だと……？」

俊之「なん……だと……？」

霖之助「君たちは僕の店に来て何をしてるんだい？」

孝之「展開はやw」

俊之「ふむ、これは早いとしか言いようがない」

霖之助「君たちは何を言ってるんだ……薬師に知り合いがあるから話しておこう」

作者「ひどい……」

霖之助「というより君は誰なんだ？ お客さんかな？」

作者「感想をお待ちしております」

霖之助「やれやれ……僕の店にまともな客は来ないのだろうか？」

作者からの報告

PCが壊れてから数日経ちました。

孝之伝とネギまの小説書き溜めしてたのですが……それがパーになったから、少しテンションが上がりがりきらない……っというより、まるつきり上がらないと言ったほうが正しいのかな？

一応、思い出しながら書いているのですが、まだぜんぜん完成してないです。

……もう書置きせずに、書いたやつパーツと載せようかな〜と思っています。

なので、更新が少し早まります。

もう展開とかそんなの関係なしで書いて載せますので……小説が雑になりますけども、どうかよろしくお願いします。

お知らせ

お久しぶりです。作者のアリストリアです。

近頃お腹の調子がよろしくないのですけども、まあなんとか元気になってます。

いやはや本当に困ったものですよ、IDとパスワードを忘れてしまっうなんて本当に俺の馬鹿としか言いようがない。

それで本題なのですけども、東方孝之伝は更新しません。更新はしませんが、東方孝之伝（再）というタイトルで新しく書こうかと思っています。

プロローグからやり直すということです。やり直すと言っても少し編集する程度です。

もしかしたら新しく話数を増やしたりするかもしれませんがね。消す理由は……プロットとか消しちゃったみたいな？（笑）

やり直しながらプロットを思い出していく感じでやりたいのです。

とまあ以上です。

これからよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9714k/>

東方孝之伝（努力伝）

2011年11月5日11時18分発行